

特275

682

2/1

市制
紀念
新岸和田市誌

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

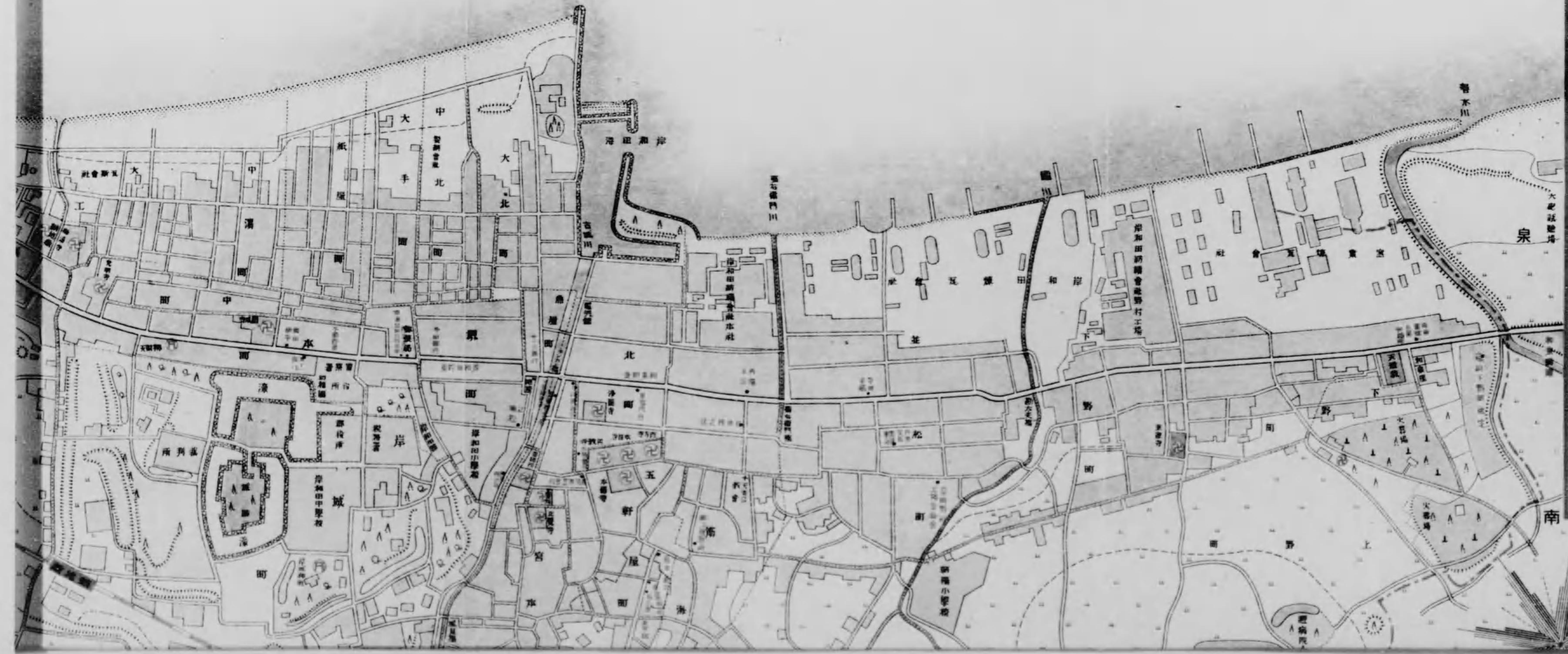
始

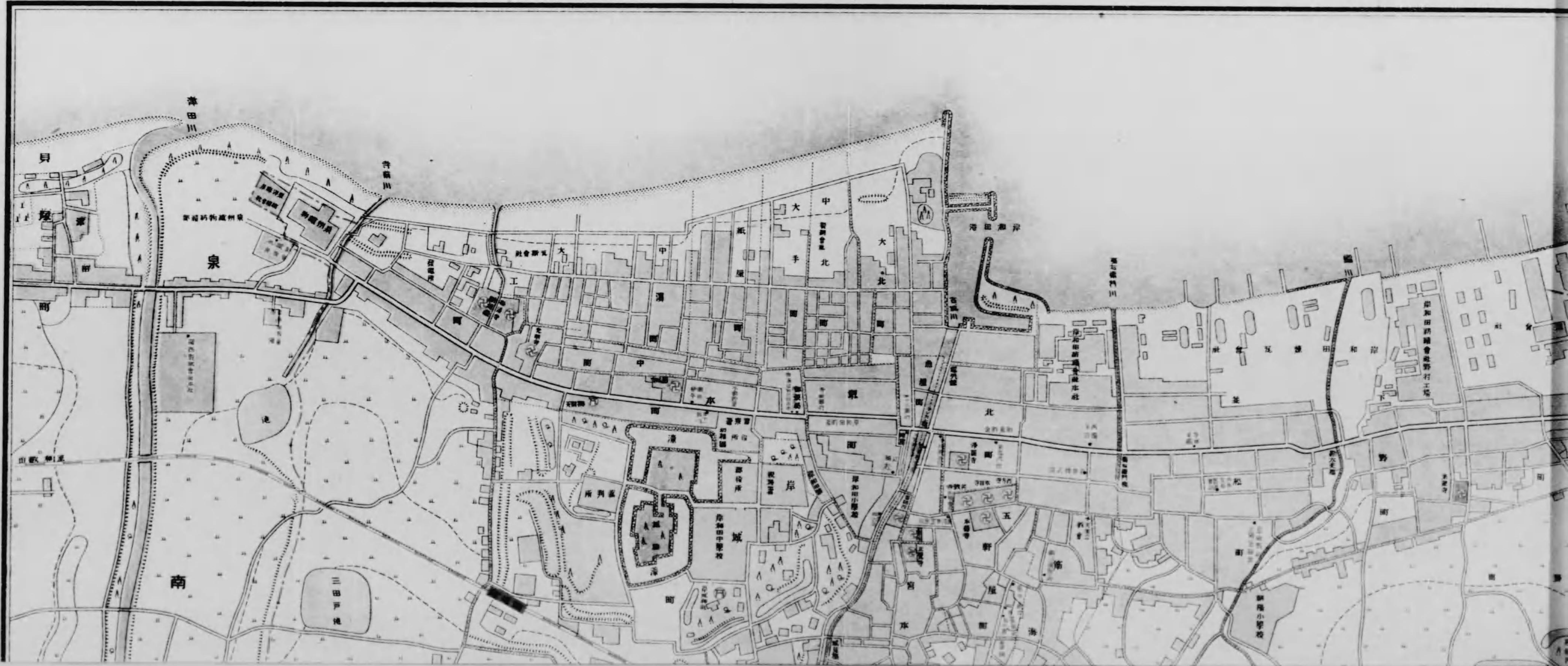


特275
82

岸和田市街圖

縮尺七千
分ノ一





津田川

貝塚

泉

町

南

三田池

寺前川

大

中

大

中

大

海田湖岸

北

所

池

岸

城

新

五

新

本

海

小

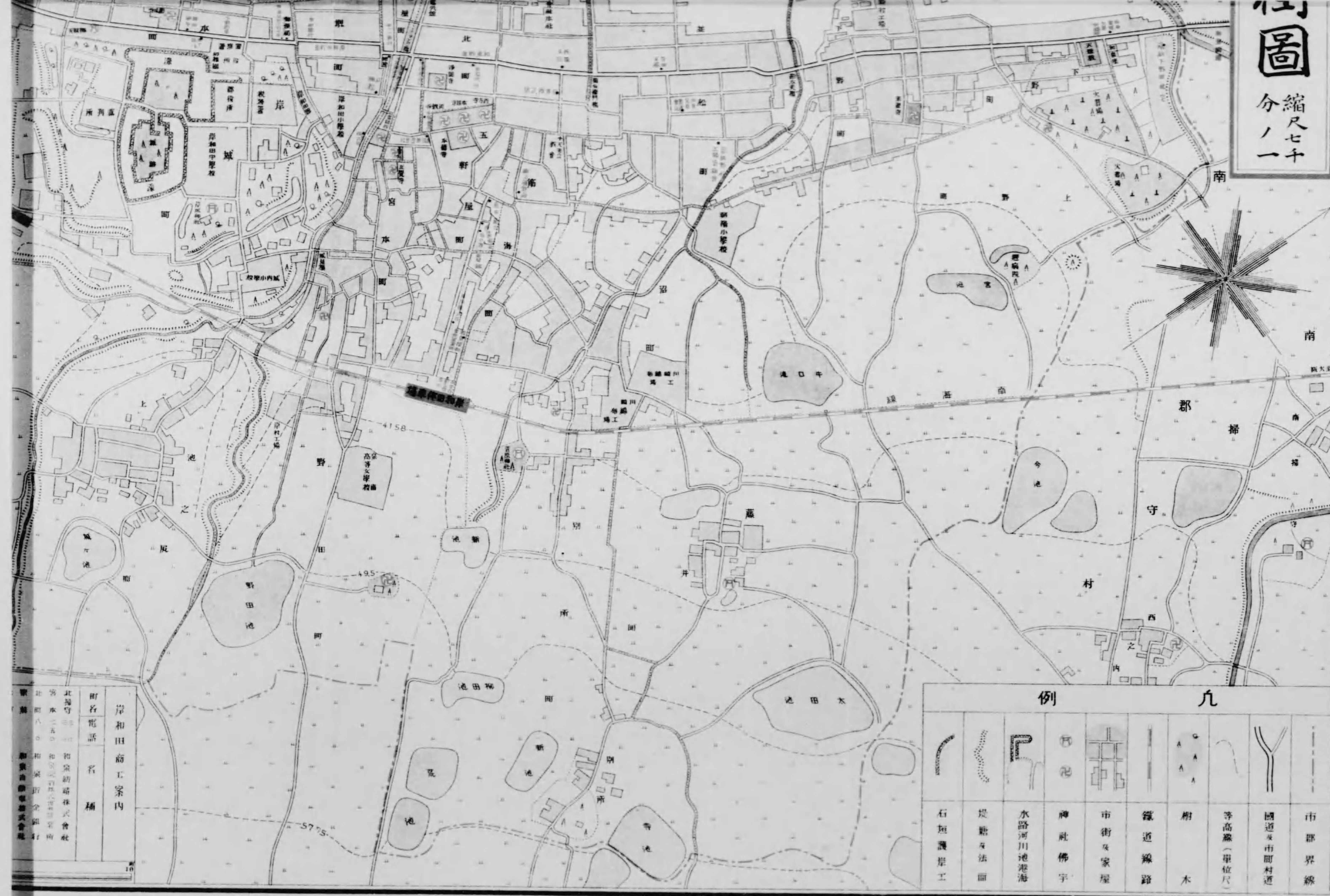
學

校

地圖

縮尺七千
分一

特275
880



例		凡	
石垣護岸工	堤防及法面	水路河川池港海	神社佛宇
市街及家屋	鐵道線路		
市郡界線	國道及市町村道	等高線(單位尺)	樹木

岸和田商工業案内
町名電話 名稱
北緯守 和泉紡績株式會社
南緯守 和泉紡績株式會社
北緯八 和泉紡績株式會社
南緯八 和泉紡績株式會社

緒言

我が岸和田は大正十一年十一月一日を以て市制を施行し今や議政、理事の兩機關共に備はり都市たるの名實を併せ得て一大工業都市建設の一人轉機を畫した、願ふに本市の今日在るは過去幾百年間我等市民の先人が努力奮闘の集積、血と膏との尊き結晶であらねばならぬ、然れば此の秋に當つて古を温ねて先人の功業を追懷感謝し今を知りて將來に處するは我等市民の當然成すべきの義務なり、此の義務遂行の一資料を提呈せんが爲に外ならぬ、本書編纂の業に従へるは實に此の義務遂行の一資料を提呈せんが爲に外ならぬ、本書は筆を南北朝時代に起し六百有餘年の史跡を辿り以て現代に及んだもので、資料は舊記に徴し口碑傳説に需め努めて正確を期したるも完結急を要するものでありて考證、修辭の違なく、且つ我等同人固より史筆に乏しく叩りに事に従ひしを以て叙述は其の順序を謬り、記事は精粗繁簡其の宜しきを得ず隔靴搔痒の憾多きは洵に己むを得ざる所である、若し夫れ世人本出を繕きて本市々勢發達の梗概を知り、温古知新の一端に資せらるゝあらば我等同人の素志は即ち足る、今や鉛槧の業を終はり本書を頒つに當り資料の蒐集に多大の助力を與へられたる先輩相澤、大久保兩氏に對して滿腔感謝の意を表し、併せて片言を叙し本書編纂の趣旨を闡明する次第である

大正十二年五月

南海週報社同人識

大正 12.5.18 丙寅

◆本書

第壹編	總論	一
第貳編	土地及沿革	同
第壹章	土地論	同
第貳章	沿革論	同
第一節	南北朝時代	同
第二節	足利氏時代	同
第三節	岡部氏時代	四
第四節	近部氏時代	五
第五節	市制實施史	六
第參編	產業	一三
第壹章	農業	同
第貳章	商業	同
第參章	工業	同
第肆章	著名工場	一五
第伍章	漁業	一六
第陸章	商工業機關	同
第肆編	運輸及交通	同
第壹章	道路及橋梁	同
第貳章	鐵道	一八
第參章	港灣	同

◆目次

第四章	馬車自動車	同
第五編	教育及宗教	同
第壹章	教育	同
第一節	沿革	同
第二節	公立中小學校	一九
第三節	私立學校	同
第貳章	宗教	二〇
第六編	官公衙及團體	二二
第壹章	官公衙	同
第貳章	團體	同
第七編	財政及經濟	二四
第壹章	財政	同
第貳章	經濟	二六
第八編	神社及名勝	二七
第壹章	神社	同
第貳章	名所舊蹟	二八
追	著名工場	三〇
第八編	人物傳	自一頁至一四頁
附錄	府會議員選舉名簿	自一〇頁



岸和田市長 舟木二三二

舟木二三二題

舟木二三二



岸和田市長舟木三二



財界元老



宇野亮一



寺田其與茂



浦田甚之右衛門



寺田元吉



岸村德平



市議會會長山田宗三郎

老 元 界 財



寺田甚與茂



寺田元吉



市議會長 山田宗三郎



宇野亮一



浦田甚之右衛門



岸村德平

新岸和田市誌

第壹編 總論

岸和田市を最も好く理解し、其眞想を探窮せんと欲せば其土地の沿革及び歴史を精讀せねばならぬ然も一國の文化の發達は之よく知るも吾居住する郷土の沿革及歴史に至つては知るものは稀である、是れ其郷土史が餘りに範圍狭少なる爲めに一般讀書子をして趣味を感せしむる底に至らしめざるが故である國家的立場より是を觀する時は一大不幸と云はねばならぬ、如何にとなれば一國の文化の中心が教育にある如く教育の根本は歴史に依つて形成せられ一國の盛衰及人心の變化は悉く亦歴史により左右せらるゝのである彼大日本史が水戸光國公に依て編纂せらるゝや水戸藩に勤王の士雲の如く起つたではないか將復頼山陽が日本外史を編纂するや愛國の志士風を望んで起ち王政維新の導火線となつた、是れ歴史の民心に對する教化の偉大な實例を示せるものに

あらずして何ぞや而も郷土誌には更に國史以上痛切なる感興を興ふるものがある一巻の小冊子中には自己の祖先あり一族ありそれらのものは歴々として紙上に現はれ、吾眼に親むるものは附近の山河である苟も愛郷心あるもの誰か郷里の事情を想はざる者かある此愛郷心こそ一國文化の發達を促し國家永遠の基礎を堅固ならしむる源泉である。

顧れば岸和田市の史籍は一の藩治紀念志を除けば極めて貧弱なもので新興發展の緒に就いた岸和田の眞相を知ることが困難である而も之を天下に知らしむる事は今日の急務である吾人は斯く信ずるが故

第貳編 土地及沿革

に不敏を顧みず五百年の古き歴史を辿つて吾岸和田市を解剖して諸子の眼前に展開せんとする。

岸和田市の眞價は南朝の忠臣楠氏一族が開拓した郷土的關係と歴史的關係が合致した所にある此土地が五百年の昔日本の代表的人物の領土として其一族が茲に居城を築き孤忠を南朝に盡したる忠臣烈士の芳魂年長へに天主臺下附近に眠れる處に脈々たる精氣が迸發して居る、則ち東西十八町南北二十三町の渺たる一都市が然も五百年前全町全燒の災厄に遇し寒村の唯一の誇とするは則ち是である吾人は此一片の事跡を辿りて古往今來を叙して聊か郷土のために貢獻せんとするものである、

定の住民が共同生活發展の消長に關する變遷の状態を研究せんとするにはその前

提として其市民の活動舞臺たる岸和田市の地理の考證より始むるの當然である
 (一)位置 岸和田市は東經百三十五度二十分北緯三十四度二十七分に位し和泉國の中央部に在り北は泉南郡北掃守村東は南掃守村と接し南は土生郷村及麻生郷村と連り西は大阪灣を距て、淡路島と相對して居る。
 (二)地勢 岸和田市の地勢は山嶽の形を呈して東西に傾斜し南北は稍平坦にして長く市域東西十八町南西二十三丁目積百五十六萬二千坪を有し北は泉北郡及び堺

市を通して大阪市に達し南は貝塚、佐野の諸名邑を経て和歌山市に至り東は葛城の連峰を隔て、紀州に隣り西は大阪灣(牙灣海)の濤波に沿して遙かに淡路島を望み摩耶、六甲の峰巒に對し風光の明媚なる全國都市中稀に見る所である
 氣候 泉南郡役所の觀測によると岸和田市の氣温は一ヶ年平均氣温華氏六十二度六分を示し最高氣温は八月に於て八十九度一分最低は一月に於て三十六度一分なりとす而して晝夜の差は一ヶ年平均十六度七分にして春秋期に於て其差は十五度

一分乃至十八度六分に達し夏期は十六度四分を超ゆる事がない、雨雪の量は既往の平均に徴して千五百三十四耗にして一年中最も多きは六月にして五月及び九月之に次ぎ最も少なきは一月及十二月である、風向は通常冬期に於て西風最も強く従つて回数も多く北風之に次ぎ東北風又之に亞ぐ春期に及び西風漸く減じて北風を増し夏期に入りては西南風稍度を加へ秋季に至りて東北風に回轉するものが恒である地籍岸和田市の地籍の細目は左の如くである。

町民所有土地ノ内外調

(大正十年五月一日現在)

地目	市内		市外	
	坪數	別地價	坪數	別地價
宅地	二七五、五七一、〇三	一、二七四、七九七、九六	一	五五五、二〇
畑地	一	一六六、六〇一	一	二五三、七六〇〇
池沼	一	一六、二一一五	一	三五、九五〇〇
山林	一	三、三三三	一	九、〇七四、〇〇
原野	一	二、六六二	一	一
計	二七五、五七一、〇三	一、二七四、七九七、九六	五	五五五、二〇

第二章 沿革論

岸和田市は千古の大忠臣楠氏の一族が南風競はざる正統の皇室に仕へて肝腦地に塗れたる土地にして我が國史上實に比類稀なる重要な土地である、吾人は今此の地の沿革を紹介するに當つて之を左の五期に區分して叙述するを以て讀者の便利なりと信す。

- 第一期 南朝時代の岸和田
- 第二期 諸將在城時代の岸和田
- 第三期 岡部氏が在城時代の岸和田
- 第四期 明治大正時代の岸和田
- 第五期 市制成立の岸和田

第壹節 南北朝時代

南朝時代の岸和田を知るの前提として和泉國の起原を知るの要がある、史を案するに元正天皇靈龜二年四月河内國の中大島、和泉、日根の三郡を割きて始めて和泉監を置いたのが一國を成すに至つた最初である後聖武天皇の天平十二年八月

に至り復河内國に併せられたが、孝謙天皇の天平寶字元年五月全く獨立した、初めて國を成すや府を和泉郡の府中、今の泉北郡國府村字府中、に置き國司の館舎は此所に在つた、因つて地を國府と稱へ爾後の長官亦みな其の跡に館したが其の姓名多くは詳でないが正史に散見せる所を徴するに、光仁天皇の寶龜七年從五位下多治比真人河内和泉使と爲り、仁明天皇の承和十年十一月參議從四位下安部朝臣安仁河内和泉の長官と爲り同十四年十二月從五位上藤原朝臣貞守和泉の次官となつた、其の他紀貫之、菅原定義、橘道真等が和泉守となつた事もある、鎌倉時代に佐原十郎左衛門尉義連守護職となつたが同人歿後は其の後任を補せられず降つて建武年中楠正成功を以て攝津、河内、和泉の三州の太守に任せらるゝや其の一族和田高家をして我が岸和田を治めさせた岸和田は元掃守郷に屬して岸と稱したが和田高家初めて城廓を此に築いて

居住せしにより人呼びて岸の和田と謂つたのが後竟に邑名となつたのである。和田氏此地に在城して和泉一國の民政を統ふるや荒涼寂漠なりし一漁村は四方より來住するもの多くなつて繁榮して茲に一都市の基礎を築くに至つた。

高家の歿後男正武其の封を襲いたが南風競はず勢威次第に衰へて足利氏の壓迫を蒙り繁榮の緒に就たる此地も屢々兵禍を蒙り住民は四方に離散して衰微を呈するに至つた、和田氏滅亡後は和田氏の一族にして春木の里の郷士たりし信濃義一の方に勢力を有してゐたので堺の太守大内義弘に推されて城主となり其の子泰連、泰連の子義明義明の子義基の父子四代相襲いで城主となつたが、元中三年、北朝では嘉慶三年、正統の後龜山天皇、南朝は北朝の後小松天皇に三種の神器を傳へて五十有餘年兩統に分立せし皇位が一統の御代となつた此の時代から足利氏の權威は天下を風靡し南朝の遺臣は隨所

迫害せられ且つ、信濃氏の後援者大内義弘が應永六年足利氏に背いて亡ぶるや信濃氏も其の所領を奪はれて民間に零落し岸和田の一郷士となつた。

第貳節 足利時代

大内義弘の戦死後は細川滿之の領となり細川氏の臣松浦肥前守此の地を治めてより代々細川氏の管下に入り享録の頃は細川氏の臣那和氏此地の代官であつた、其の當時は所謂我が國の戰國時代にして天下は麻の如くに亂れ群雄四方に割據し攻戰略奪絶ゆることなく全國民一日として其の生に安んぜざるの時代にして我が岸和田とても素より太平を樂む事は出来なかつた。

降つて永祿年中三好義賢が弟十河一存安宅冬康等城主たり、三好氏は元長以來細川晴元を援けて勢力漸く加はり元長の長子長慶に至りて近畿及南海に其の威武を振ひ晴元の子信良を奉して權勢匹敵する者なり江州の六角義賢之を喜はず晴元の次子晴之を擁して彼に拮抗せんとした。是より先河内の畠山高政家臣安見美作に追はれて紀州に奔るや三好氏之を救はん

として岸和田城主十河一存及び松永久秀をして美作を征せしめしも勝たず長慶乃ち永祿二年六月大軍を率ひ再び河内を征し美作等を追ひ高政を迎へて高屋城復歸せしめたるに高政再び美作を呼返して國政を委ねたので長慶怒つて弟義賢入道實休と謀り高屋城に迫つたが高政の父政國紀州より來り長慶に講ふ所あり乃ち高政美作を許し城を致して去らしむ高政等界に奔つたので全く三好氏の手にしたり歸したが高政は永祿四年二月熊野根來の法師及び土豪を驅り紀州を出て、和泉に發向した、時に實休は堺の津に陣してゐたるより安宅攝津守久康十河一存等をして淡路の軍勢二千餘騎をして岸和田城を

守らしめ已は五畿内の精兵二萬騎を率ゐ進みて久米田山に陣し數日間高政勢と戦ふも利あらず三月三日流矢に中つて戦没した久米田に近き民家石碑あり世々云傳ふる所によれば實休死後幾年かの後夜陰屢々精靈出現して同地小松里の住民に墓の建を求て止まないの住民は一基の墓石を建てた久米田村大字額原の東小栗街道に近き處に現存するものは即ちそれで

在る。

其の後和田兵衛なる者此の地を治めしが織田氏の時に至り和田氏の臣松浦安太夫として更に保ちて南冠に備へ屢々武功を現はし後寺田又右衛門代つて城主となつたが間もなく勝端寺の戦に於て戦没し、松浦氏は後年石田治部少輔三成に薫したるの故を以て徳川氏の亡ぼす處となり子孫断絶した。

豊臣氏の時代には堀久太郎朝日大藏等織田氏の城代として少時つゞ在城せしも詳かならず中村一氏秀吉の命により紀州根來雜賀の押として此の地に在城した後小出播磨守秀政之に代つた秀政は秀吉と同郷にして尾張中村の人大政所の妹を妻として太閤の寵臣たり秀政大に樓閣を修補し天守を築き規模の壯觀を加へた秀吉薨去後徳川家康の聲望益加はるや五大老の一人上杉景勝五奉行の一人石田三成と謀つて家康を除かんとし會津に歸つて兵備を納めて命に従はず家康兵を率ひて東征の途に上つた此時秀政病んで自ら軍に従ふ能はず、二男遠江守秀家をして代つて從軍せしめた然るに嫡子大和守秀政は石

第參節 岡部氏時代

吾岸和田市の恩人たる舊藩主岡部氏の事蹟は悉く藩治紀念誌に存するを以て其重復の繁をさけ其概略を擧ぐれば、寛永十七年岡部美濃守宣勝攝津高槻より轉じて城主となり、爾來子孫相承けて明治維新に至つた。

而して岡部氏入城以降當町の石高は實に左の割合を以て計上せられた。

二千九十四石四斗二升二合	岸和田村
五百三十五石七斗七升六合	野村
四百九十七石五斗七升五合	筋遠町
二百三十四石九斗一升八合	別所村
二百二十五石三升四合	藤井村
計三千五百八十七石七斗二升五合	

浦 役

外に銀六百目

山 年 貢

以上の石高は時によつて多少の増減があつたとは申すまでもない、岡部氏藩治の時代に於ては元の岸和田及濱町を以て岸和田と稱し岸和田村獨立し沼野村は掃守郷に屬してゐたが、明治維新の際に沼野村、岸和田村、濱町、岸和田町を合して岸和田と稱し各庄屋をして治守せしめ

しも明治四年廢藩置縣の結果從前の制度を廢して堺縣第三大區第一小區に屬した

願ふに岸和田が今日の發達をなし我が國著名の一都市となりしは寛永年間岡部氏入城以來二百有餘年間子孫相嗣いで藩政を執つて民生を撫したると京都、大阪堺より當地を経て和歌山に通する要衝の地なりしが故に四方より來住する者多く漸次戸口増殖した爲である。岡部氏入城以來明治維新に至るまで二百有餘年間に於ける出來事にして傳ふべきもの尠しとせぬが、之を詳説せんには尠然たる一大冊となり、頁數に限りある本書の能くする所にあらざるを以て爰には年次を追ふて其の梗概を紹介するに止むる。

元祿三年 打瀬網を造り遠洋漁業を開始す

寛永三年 堤防を魚棚川の川尻に築く

享和元年 十二月十八日碩學相馬肇生

文化十四年 六月岸和田港を開く

天保三年 五月二十日賢母寺田徳子生(寺田甚與茂氏の母堂なり)

同十三年 十二月十三日碩學土屋弘

信濃氏より松平氏に移り變る間或は兵亂あり治平ありと雖も概して岸和田は次第に繁昌の度を進め戸口増加した事は疑を容れない、而して其原因は云までもなく和歌山より堺に通する一道路中最も樞要なる地區として自然に繁榮したるは理の當然である。

生る

永嘉元年 二月十五日農事改良熱心

家岸田鹿藏生る

同 六年 我が國紡績界の巨人にし

て現に關西經濟界の重鎮たる寺田甚與茂生る

安政元年 十一月十六日舊藩公現樞

密顧問官從三位子爵岡部長職生

同 年 四月四日日吉瑞生る

同 三年 九月政治家佐々木政又生

文化二年 五月十九日川崎德太郎生

安政元年 川崎長左衛門生る

慶應二年 九月二日發明家坂口岩藏

同 二年 十二月三十日法學博士松

浪仁一郎生る

第四節近代史

時代は人物を生むと云ふ事が事實なれば岸和田の近代史は人物として天下に誇るに足るもの一二なければならぬ、思ふに明治維新後に於ける偉大なる人物とし

ては土屋弘岡部長職、寺田甚與茂、松浪仁一郎及び佐々木政又等を推さねばならない。

寺田の富力、岡部の官位、土屋松浪の學識、佐々木の政略、實に吾岸和田の代表的人物と謂つて可なりである、若し夫れ岸和田が明治四年庄屋制度を廢し大小區制度と爲し岸和田町の面目を改めし如きは是れ今日の繁盛を致したる原因であらねばならぬ。

同五年無職藩士の爲めに煉瓦製造所を設けたるは則ち工業都市たるの發祥にして、同十七年四ヶ町村の戸長役場を聯合して岸和田聯合役場と稱し官選戸長をして行政事務を掌らしめたるは今日市制の動機で同二十五年岸和田紡績會社の成立は是れ則ち紡績業の初めであつて此の工業の發展は工業都市に一步を進め斯くして岸和田は次第に發展して今や關西地方屈指の工業都市として旭日昇天の勢を以て向上發展して居る、著者は市制施行するに至れる最近の動機たる明治四十五年一月一日大字南町外二十四ヶ大字を合併して岸和田町を成立せる當時の経緯を摘記して其の依て來れる所以を明にせん

するものである。

時は明治四十四年港灣問題に就て紛議を惹起し當面の責任者高井濱町長は全部其責任を負ふて其の職を辭するや、同氏と從來行動を共にせし岸和田町長安藤祥始、沼野村々長川崎長左衛門、岸和田村分長浦田甚之衛門の四箇町村長は責任を々々連袂辭表を提出した爰に於てか群議百出底止する所なく紛擾は更に紛擾を生み前途實に憂慮すべきものがあつたが、多年町村政を掌握し勢威他の窺倫を許さなかつた高井村長等四個町村長等の離伏するや十年前より地方自治團體の基礎確立、住民の福利増進の目的を以て四個町村の合併を高唱力説せるも時可ならず空しく時機の到來を俟ちつゝありたる思成會員等は時機來れりと結束して立ち宿志を貫徹すべく幹事宮内可一、中村宇一郎廣澤耕作の外三名は會を代表して寺田甚與茂、川崎長左衛門、浦田甚之右衛門、川井爲己の四元老に町村の合併が地方の繁榮と住民の福利増進に益する所以を力説し四元老の承諾を得て多年の懸案は一朝にして圓滿に解決せんとしたが、世事は意の如くならず些々たる感情の行違ひ

が禍因となつて一大波瀾を捲き起し折角成立せんとした合併問題に一頓挫を生じたのは尙に詮方もなき次第と謂はねばならない。

思成會員らは一難に遭うて其の結束は益々鞏固に所志を貫徹すべく猛進する事に決し幹事宮内可一は土地の名望家川井爲己を動して町村合併論を高唱し一方時の代議士井阪光暉をして監督官廳の諒解を求めしむるに川井爲己と意思の疎通を缺き合併反對派の陰然たる首領となつた浦田甚之右衛門の説得に努めさせた浦田氏は元より合併には反對ではなかつたが川井氏との間に意志の溝渠があつた事とて井阪代議士の言に耳を假さず沼野村の有志と相提携して反對の大運動を開始し、思成會に挑戦するに至つた、當時合併反對派は聲明して曰く

吾人は町制に對して敢て反對するものにあらず也、然れども今直ちに是れをわふに於ては農民を基礎とする吾村民は一着に於て負擔の過重に苦しみ、然る幸福を得るの少にして不幸を受けるの更に其大なるを恐る、一方に於ては高井濱町長は全部四箇町村長の

責任を擔ふて罪を受けつゝあり、此際

に於て彼高井の責任解決する迄即ち二箇年間の延期を爲すを當然なり云々と延期論尙早論を高唱したが思成會派川井派はこれに耳を假さず井阪代議士をして大阪府廳及び内務省を動かして合併認可の諒解を得るに至つた、此の報に接したる延期派浦田、川崎派は飽まで合併即行に反對し町村民大會を開きて反對の氣勢を擧げ四町村民中より代表者を選び浦田、川崎の兩氏之に加はり一行は草鞋脚絆に身を堅め竹の皮包み梅干入りの辨當を携帶して大阪府廳に出頭して府知事に會見を求めた、府知事は事態の容易ならざるを見て言を左右にして之に應せなかつたが代表者等は素より覺悟の事とて午前より午後に亘り頑として動かす會見の目的を達するにあらずれば動かざるの氣勢を示したので、府知事も遂に代表者等の熱心に動かされて會見し代表者の陳情を聴取し考慮すべき旨を誓ひたるより一同は大に喜び七里の長途を徒歩して歸つたが首領浦田、川崎の兩人は合併即行派が既に内務大臣の諒解を得たるを知了せるを以て府知事の誓言の

みでは安んずることが出来ず即夜行李を納めて上京し時の内務大臣一本喜徳郎、内務省地方局長床次竹二郎に會見して合併の尙早なる理由を開陳し其の考慮を求めて歸郷した、然るに合併即行派では反對派必死の運動により形勢追々自黨に非なるより更に作戰計畫を立て直し四個町村の協議員を招集して聯合協議會を開き一般投票により一舉に目的を達せんとしたるも、形勢は依然として轉換の様相がないので、尙早派の野口房吉を密かに自派に引入れ投票を決定した處五對四即ち一票の多數を以て合併に決した、大勢既に決せるより各町村會に於ても反對論は勢力を失ひ府知事より發せられたる合併に關する諮問は何れも多數を以て町村會を通過し、井阪代議士亦大阪府知事及び内務大臣に會見して陳情し當局者も町村會に於て正規の決議を経たるものなるを以て合併を認可し、斯くして紛擾に紛擾を重ねたる多年の懸案も解決し四個町村は合併して岸和田町となり町制を實施する事となつた。

岸和田町は成立し町制實施せらるゝ事となつたので中井泉南郡書記は町長事務

管掌を命ぜられ町會議員の選舉を執行し町會成立するや村田宜寛を町長に推薦し爰に町政執行機關の成立を見たのである

村田町長在職中の岸和田町は大正七年の米騒動以外には何等の政變もなく平温順調に進み大正九年村田町長の任期満了するや助役橋龜太郎を町長に推薦就任した。

四個町村を合併し町制實施して以來の岸和田は旭日昇天の勢を以て隆々發展し其の實力は優に市制を實施するに足るものありて市制實施の機運は刻々迫つて來たが、即時實施、尙早の二派に別れて論難し一時紛糾を極めたるも大勢は市制の即時實施に傾き諸般の手續を了して大正十一年十一月一日を以て市制を實施する旨内務省より發布せられ、爰に住民多年の希望は達成した。

編者は此の機會に於て明治四年庄屋制度を廢して五十有餘年市制を實施するに至るまでの間に起つた重要な事項を年次を追ひて其の梗概を叙述し温古知新の資料に供する。

明治四年庄屋制度を廢して大少區制度と爲す。

是の時岸和田村と濱町との二町一村は第三大區の第一小區にして沼村と野村との二村は同第一小區の四番組なりき是歳五月二十九日篤志家宮内可一は五年無職藩士の爲に煉瓦製造所を創立す岸和田町に於ける諸工業の濫觴なり此歳岸和田郵便局を創立す

同六年五月區學校を以て小學校と改稱す岸和田尋常小學校是なり

同六月政治家廣澤耕作生る

同七年沼村と野村とを合併して沼野村を組織す、是の歳岸和田警察署を置く

同年實業家松浪定吉生る

同十一年五月五十一銀行の創立あり金融の道是に啓發す

同十二年三月二十八日碩學相馬肇逝く同年實業家中村宇一郎生る

同十三年四月郡區町村編制法を施行して南日根野郡役所を置き五月一日開廳式を行ふ

同十五年大阪窯業株式會社岸和田工場を創立成る

同十七年四ヶ町村の戸長役場を聯合して岸和田聯合役場と稱し官選戸長をして治めしむ是の歳岸和田港に堤防を築く

同十八年士族の授産場を起してナル製造に從事せしむ十二月岸和田警察署の廳舎を新築す

同二十年岸和田煉瓦株式會社の創立成る

同二十一年十二月十五日孝子吉野ヲヨ生る是歳大阪水上警察署岸和田派出所を大北町に置く

同二十二年七月收稅部岸和田出張所を郡役所内に置く

同二十三年町制發布せらる是の歳藤井村と別所村との二村を掃守村の内より割きて沼野村に合併聯合役場を廢して各町村に役場を置き公選して町村長を定め自治制を實施せしむ乃ち安藤祥始は岸和田町長に高井泰三は岸和田濱町長に阪井又八は岸和田村々長に川崎清平は沼野村々長に當選せり是歳堺區裁判所岸和田出張所を大字北町の民家に假設す又收稅部出張所を岸和田直稅分署とす

同二十四年一月堺區裁判所岸和田出張所獨立して岸和田區裁判所と爲る

同二十五年岸和田紡績會社成功し地方實業界の現象を示す是年岸和田區裁判所の廳舎を大字北町に建設す十二月岸和田

田直稅分署を岸和田收稅署と改稱す同二十六年四月大阪府土木課岸和田出張所を郡役所内に置く

同二十七年岸和田貯蓄銀行の設置成る

同二十九年四月一日南日根郡役所を泉南郡役所と改稱す十一月岸和田收稅署を大字本町より大字岸城町に移し岸和田稅務署と改稱す

同三十年和泉貯金銀行の設置成る、四月大阪府立岸和田中學校を創立す五月十七日開校是年私立補習學校を設置す

同三十一年十一月十五日大元帥 明治天皇岸和田中學校に臨幸あり

同三十四年四月大阪府立泉南高等女學校を創立す

同三十五年一月岸和田警察署の廳舎焼し假に圓城寺を以て事務所と爲し尋て再建築落成す四月岸和田城内尋常小學校と岸和田朝陽尋常小學校との創立成る

同三十六年八月岸和田濱尋常小學校を新築す

同四十年寺田銀行及泉州織物株式會社川崎合名會社等の創立成る是年五月十九日政治家佐々木政又逝く

同四十二年泉州精米株式會社及和泉水力電氣株式會社岸和田吳服株式會社等の創立成る

同四十三年中村鉛筆製造株式會社の創立成る

同四十四年二月一日賢母寺田德逝く十二月二十五日岸和田町と岸和田濱町と岸和田村と沼野村と以上四ヶ町村を廢す是年株式會社岸和田タオル商會及泉州瓦斯株式會社等の創立成る

同四十五年一月一日大字南町外二十四ヶ大字を合併して岸和田町を置き假に泉南郡役所の吏員中井義朝を代理町長と爲し町政を執らしむ二十日篤志家宮内可一逝く三月一日二日の兩日を以て町會議員を選舉し二十五日村田宜寛を公選し町長に聘し爾來町政其宜しきを待

至町今日の發達を見るに至る是年關西製綱株式會社の創立成る

大正二年川崎肥料株式會社の創立成る四月岸和田區裁判所堺區裁判所岸和田出張所に復舊す同三年和泉金融株式會社及南陽無盡株式會社泉南貯金信託株式會社等の創立成る同四年和泉勸業株式會社の創立成る是年岸和田下野町郵便

局を設置す

同五年株式會社不動貯金銀行岸和田支店の設置成る

同六年日之出鉛筆株式會社成る

同七年日本勸業株式會社岸和田支店の設置成る和泉運輸曳船株式會社成る

同七年八月十四日米騒動起る此時暴徒は町内の米屋をおそひ米を奪取して寺田見龍、十嶋吉太郎兩郎を焼く在郷軍會の力と軍隊の應援により一時小康を得たり

同八年山下鑛業株式會社及び株式會社四十三銀行岸和田支店の設置成る

同八年合名會社木島屋商店成る

同八年岸和田紡績用品株式會社成る

同八年大手織物株式會社成る

同八年岸和田屑物株式會社成る

同八年株式會社和泉商店成る

同九年和泉商事株式會社成る

同九年和泉鑄造鐵工株式會社成る

同九年岸和田瓦株式會社成る

同九年極東採金株式會社成る

同九年佐野紡績株式會社成る

同九年寺田合名會社成る

同九年村田宜寛任期満ちて公選して橋龜

太郎を町長となす
同九年十月一日全國に於て國勢調査をなす
す當町は在郷軍人會の手により完成さる

同十年三月中に本町公設市場なる同市場
發會式當日に於て堺安之助、原靜村等
の市制促進演說會を開き越へて四月に
至り町會に於て堺安之助の發案に依り
市制實施可否の論あり多數は實施賛成
に傾き六月中原案可決して内務省に上
申書を呈し十月上申書及五箇年間財政
計劃書成り主務省に呈出し市制の許可
を待つ其町會に於て屢々賛否の議あり
しも三十名の議員中市制に反對するも
の及尙早を説く者は僅に二名のみ曰く
山田宗三郎、中川英彦而して賛成側の
議員は島田良藏、田代循、堺安之助、
松浪定吉、佐野馬太郎、佐納千太郎、
西端辰之助、辻本芳松、鍋谷卯三郎、
大槻與三郎、中田九一、阪口治平、小
玉八平、十場吉太郎、角谷、岩城龜造
等數名なり、斯くして主務省の許可を
待つ事一年有半なりしも、容易に其認
可なく井坂代議士をして中央政府の意
向を探らしめ一方松浪博士岡部子爵等

をして猛烈運動する所あり茲に於てか市
制の機運刻一刻として迫り來る
大正十一年八月二十五日岸和田商工會は
中村宇一郎、内田彌七、堀蘆江等憤然
として起ち思成會の寺田元之助等と互
に氣脈を通して茲に町民大會を開き大
いに輿論の喚氣に勉む八月二十九日町
民大會を町校講堂に開く參集者無量千
名可否の論を戦はず、日吉端、山田宗
三郎、中川英彦等尙早論を絶叫し島田
良藏、寺田元之助、中村宇一郎、橋龜
太郎、内田彌七、原靜村外數名之に反
對し原案可決に至らず遂に中村市長に
一任して五十七名の委員を選定して散
會す越へて九月一日郡會議事堂に於て
委員會を開き再び可否の論を戦はず此
日浦田甚之右衛門兩者の感情を和解せ
しめ滿場一致を以て市制實施即行案を
可決す

十月二十一日主務省より認可の通知あ
り十月二十九日最後の町會を開き遂に
町會を解散す
十一月一日岸和田町を岸和田市となし
大阪府理事官兒玉政介岸和田市々長管
掌を命せらる

第五節 市制實施

市會議員選舉 市民が多年翹望した市
制は愈々大正十一年十一月一日を以て實
施せられた、第一回市會議員として岸和
田市建設時代の市政參與の榮冠を戴かん
とする人々は市制實施の聲を聞くや早く
も市會議員候補に立つた、其の數實に四
十五名にして定員に超過すること十五名
である、此等の候補者は年末年始の多忙
をも打忘れて東奔西走、或は言論戦に、
或は戸別訪問に、或は蚤騷情實を辿つて
激烈なる運動をなし、岸和田未曾有の政
戦を惹起したが、大正十二年一月十三日
は二級十四日は一級の選舉執行の結果左
の三十名が當選の月桂冠を戴いた

貳級選出議員

- 西ノ内房吉 川崎 清定
- 川崎 正一 辻 利一郎
- 浮舟音次郎 内田 彌七
- 松浪 定吉 松原寅次郎
- 松谷熊次郎 榮木 十一
- 笹島庄一郎 堺 安之助
- 金納伊之吉 北濱斗一郎
- 岸上市太郎

壹級選出議員

- 土生 半藏 奥 佐太郎
- 落合準之助 川口松太郎
- 田代 循 中村宇一郎
- 山田宗三郎 坂口 治平
- 佐野馬太郎 岸 村 齋
- 岸田喜代門 島田 良藏
- 東 磯太郎 十場吉太郎
- 鹽谷 伊助

市會議の成立 市會議員の選舉は空前の
大競争を演じて執行せられ、選舉も確定
せるを以て大正十二年一月二十五日第一
回の市會は招集せられた、然るに之より
先き前町會議員にして市制實施實行委員
にして當選せるものと、新たに當選せる
ものとの間に意見の衝突を來たし數次妥
協を試みたるも遂に成立せず早くも市政
界の前途に一抹の暗雲を投じた、市會議
員が市民俱樂部、同志會の二派に分れた
のはこれがためである
同志、市民の兩派は陣容を整へて第一回
の市會に臨みたるが、年長の故を以て岸
田喜代門を假議長に推し兒玉市長職務管
掌より市會招集の理由を演説しいよ

市會議長の選舉に移り、投票の結果

十六票 山田宗三郎
十四票 田代 循
の順序で市民派の推した山田宗三郎が第
一世市會議長たるの榮冠を戴き副議長は
銓衡委員に附託し二十七日開會し川崎正
一は銓衡委員長として

辻利一郎

を副議長に推薦せる旨を報告して滿場の
同意を得て辻利一郎就任し續いて市參事
會員の選舉を執行した所左の通り當選就
任し爰に新岸和田市會は成立した

浮舟音次郎 中村宇一郎
松浪 定吉 金納猪之吉
佐野馬太郎 奥 佐太郎
市長の選舉 市會成立するや内務大臣
は一月三十一日付を以て市會に對して市
長候補者三名推薦命令を發した、依つて
二月五日市會を招集し兒玉市長職務管掌
から市長候補者推薦命令ありたるに付速
かに候補者を推薦して御裁可を仰ぐべし
と宣したが、第一世市長として最好の適
任者を推薦せんと欲せば其の詮衡を慎重
にせねばならぬ、而して銓衡を慎重にせ

んには所詮銓衡委員に附託するを以て可
なりとする事に滿場一致し土生半藏、落
合準之助、奥佐太郎、松浪定吉、佐野馬
太郎、中村宇一郎、浮舟音次郎、金納猪
之吉、松原寅次郎の十名は投票の結果銓
衡委員に當選しいよ、正式に市長候補
者の人選に着手した
市會議長選舉當時は市民俱樂部、同志會
の二派に分れ、市民俱樂部は二名の多數
を占めて居つたが、市民俱樂部員中の四
名は嚴正中立的態度を執つて市政に臨む
ことに申合はせ中正會を組織し爰に市會
の分野は三派に分るゝ事となつた
市制實施以來第一世市長は市民の輿望隆
々たる市の元老浦田甚之右衛門を推薦し
以て市政の圓滿進行を圖るべしとの議論
が盛であつた詮衡委員は此の市民輿論に
鑑み第一回銓衡委員會に於いて滿場一致
を以て浦田甚之右衛門を推薦して其の職
起を請うたが、同人は固辭して肯せなか
つた、ゆゑ三派の結束は忽ち破れ同志會は
前泉南郡長竹内實を市民俱樂部は岸和田
出身の舟木二三二氏を推薦して兩々相下
らず衡争したが、舟木二三二氏は中途形
勢の非なるを見て捲土重來の策を立て候

補を辭退したが、市民派は同志會の推薦せんとする竹内實に替せず銓衡は幾度か行詰り其の間に於て數名の候補者を擧げたが何れも全會一致の形勢を作るとは出来なかつた。

此間銓衡委員會を開く事十數回、三派は徒らに暗闘を事とし容易に決せないのを見て、市民は其の不誠意を責むるの聲漸く盛ならんとするに至つたので、銓衡委員等も大に自省する處あり、三派又た徒らに時日を遷延するの不可なるを覺り四月二十六日、同二十七日の委員會に於て急轉直下の變に候補を辭退したる舟木二三二を推薦する事に決定し同二十九日市會を開いて

第一候補者 舟木二三二
 第二候補者 川崎長左衛門
 第三候補者 川崎清平

を選舉し直ちに監督官廳に報告した處、當局に於ても慎重調査の上内務大臣より御裁可を奏請したが四月三十日を以て第一候補者

舟木二三二
 に對して就任の御裁可があつて爰に岸和

田市政執行機關の成立を見る事となつた編者は本編を終るに當つて市制實施當時に於ける助役以下の市吏員及び四個町村合併以來の町會議員の氏名を録して他日の參考に資する事とした。

岸和田市吏員

助役	菅田元成
收入役	村上廣恒
技手	丹羽繼志
書記	羽場多次郎
同	辻村伴吉
同	西澤祥太郎
同	本庄孝三郎
同	新川一男
同	佐野才次郎
同	薮野精一
同	菅野精一
同	内田宇喜一
同	坂井棟次郎
同	坂下清太郎
同	宮本藤吉
同	坂橋義三
同	高橋義三
同	相澤正彦
同	和田惣太郎

歴代町會議員

明治四十五年三月一日選舉

書記	梶野廣司
同	奥野三郎
同	新井平三郎
同	長澤桂四郎
同	一奥向佐一
同	奥三郎兵衛
同	柳野八十八
同	松村政一
同	北條邦雄
同	星野一雄

▽一級選出

川崎德太郎	坂口治平
山崎秀四郎	佐野馬太郎
覺野伊三郎	廣澤耕作
中村宇一郎	松村熊二郎
角野喜平	川岸丈吉
岸田喜代門	日吉端
土生半藏	

▽二級議員

金納猪之吉	赤井由三郎
三田長太郎	辻孫代門
寺田元吉	濱口龜太郎

一級選出

澤 潔	岩城 龜吉
岸田喜代門	小玉 八平
坂口 治平	松村熊二郎
島田 良藏	十塲吉太郎
濱口龜太郎	田代 循
松浪 定吉	中田 九一
辻本 芳松	大槻與三郎
山田宗三郎	

二級選出

西端辰之助	佐野馬太郎
金納猪之吉	辻 金 男
山崎 良吉	道姓德太郎
野口 勝太	角谷安太郎
中川 英彦	奥 佐太郎
堺 安之助	佐納千太郎
鍋谷卯三郎	楠谷 伊助
浮舟晋次郎	

第參編

第壹章 農 業

本市域は概して耕作に適し農業戸數及地反別は別表(本書第二頁)の如きも比較的大地主に乏しくして小作者大部分を占む、而して小作料は土地の良否により一定せざるも一反歩に付一石二斗より一石五斗を納付し其の收穫高表毛は米二石五斗裏毛は麥二石或は菜種一石前後を普通として居る、肥料は從來人糞を主としたが、近來は餅粕其の他人造肥料を使用する者が多くなり、又耕作には牛馬を役する者追々其の數を加へた

産 業

我國商業の中心たる大都大阪に接近せる當市は古來よりの習慣をして直接大阪と取引をした關係上商業は舊藩時代より振興せず僅かに少規模なる取引行はるゝのであつたが時世の進展と日露戦役後購買力の膨脹とは商業家の覺醒を促がして、或は米穀商に或は青物組合に其の營業種類により組合を組織し規約を設け健實なる歩調を執る傍ら無謀なる競争を警戒するに至つたので商業は長足の進歩發達を遂げつゝある

第貳章 商 業

雄略天皇の御宇に於て遠く三韓より機業

大正五年三月二日(第二回選舉當選)

川崎 清平	安藤 祥始
川崎長左衛門	宇野保太郎
岡田 惣吉	垣 純 吉
佐野 清平	淺田 吉松
村上 宇藏	

一級選出

角野 善平	辻利平
澤 潔	岸田喜代門
垣 純 吉	澁谷 治平
阪口 治平	松村熊二郎
川口松太郎	岡田 惣吉
佐野馬太郎	十塲吉太郎
濱口龜太郎	土生 半藏
中村宇一郎	

二級選出

三田長太郎	金納猪之吉
森川仁之助	寺田 元吉
島田 良藏	川崎善右門
松浪 定吉	辻本 芳松
佐納 音藏	津田 吉松
道姓德太郎	岩城 龜吉
池内直次郎	小林安太郎
川崎 藤七	

大正九年三月二日(第三回當選)

者を聘し隣國河内に於て木綿を製造したる結果其の製品は河内木綿として名聲全國に普がりしが當國も其の餘慶を受け古來より木綿製造に従事せるもの尠なくなかつた、然れ共岸和田は僅かに副業として製織するに留つたが、明治五年無職舊藩士のため煉瓦製造所の設けられしを初めとし同十八年に至り士族授産場を起してネルの製織を開始し同二十五年岸和田紡績會社創立され當町工業界は漸く曙光を認め得るに至つた

明治十五年大阪黨業會社が當市附近の土質が煉瓦に好適する故を以て分工場を建設せるや土地が大阪に接近せるに地價の低廉なるに且つ船運の便あるに依り爾來各種工場を設置相亞ぎ今や工業會社の總資本額は一億萬圓以上を算し煙突林立煤煙天を覆ふの盛觀を呈し全國有数の一大工業都市となつたが、市制の實施を機會に將來更に一大發展をなすべき趨勢にある

今本市内に於ける資本金一萬圓以上を有する商工業會社を掲げて其の如何に工業の盛大なるかを示すであらう

本店ヲ有スル商工業會社

- | | | |
|--------|---------|--------------|
| 業別 | 資本金額 | 會社名 |
| 精米精麥業 | 二五、〇〇〇 | 泉州精米株式會社 |
| 綿糸紡績業 | 五〇、〇〇〇 | 岸和田紡績株式會社 |
| 文具製造業 | 一〇〇、〇〇〇 | 川井文具製造株式會社 |
| 瓦斯供給業 | 一五〇、〇〇〇 | 泉州瓦斯株式會社 |
| 呉服販賣業 | 一五〇、〇〇〇 | 岸和田呉服株式會社 |
| 電氣供給業 | 三〇〇、〇〇〇 | 和泉水力電氣株式會社 |
| 煉瓦製造業 | 三〇〇、〇〇〇 | 岸和田煉瓦株式會社 |
| 綿布製造業 | 五〇〇、〇〇〇 | 泉州織物株式會社 |
| タオル製造業 | 三〇、〇〇〇 | 株式會社岸和田タオル商會 |
| ロープワキ | 九〇、〇〇〇 | 關西製綱株式會社 |
| ヤリ製造業 | 一〇、〇〇〇 | 株式會社岸和田青物市場 |
| 青物仲立業 | 一〇、〇〇〇 | |
| 無盡業 | 五〇、〇〇〇 | 南陽無盡株式會社 |
| 肥料販賣業 | 五〇、〇〇〇 | 川崎肥料株式會社 |
| 鉛筆製造業 | 五〇、〇〇〇 | 日之出鉛筆株式會社 |
| 白木綿製造業 | 五〇、〇〇〇 | 川崎綿布株式會社 |
| 木管製造業 | 一〇〇、〇〇〇 | 岸和田紡績用品株式會社 |
| 石炭油販賣業 | 一〇〇、〇〇〇 | 岸和田石炭株式會社 |
| 海軍運輸業 | 一〇〇、〇〇〇 | 和泉運輸曳船株式會社 |
| 製材業 | 一〇〇、〇〇〇 | 和泉運輸曳船株式會社 |
| 綿布製造業 | 二〇〇、〇〇〇 | 大手織物株式會社 |

- | | | |
|--------|---------|------------|
| 有價證券買入 | 一〇〇、〇〇〇 | 和泉商事株式會社 |
| 買入古物 | 七五、〇〇〇 | 岸和田居物株式會社 |
| 鑄造業 | 五〇、〇〇〇 | 和泉鑄造鐵工株式會社 |
| 瓦製造販賣業 | 五〇、〇〇〇 | 岸和田瓦株式會社 |
| 各種織物業 | 一〇〇、〇〇〇 | 株式會社和泉商店 |
| 砂金採收業 | 三〇〇、〇〇〇 | 極東採金株式會社 |
| 附帶事業 | 五〇、〇〇〇 | 佐野紡績株式會社 |
| 附帶事業 | 五〇、〇〇〇 | 佐野紡績株式會社 |

本店ヲ有スル銀行

- | | | |
|-----|---------|------------|
| 業別 | 資本金額 | 會社名 |
| 銀行業 | 一〇〇、〇〇〇 | 株式會社和泉貯金銀行 |
| 同 | 一五〇、〇〇〇 | 同 |
| 同 | 一〇〇、〇〇〇 | 同 |
| 同 | 一〇〇、〇〇〇 | 同 |
| 同 | 二〇〇、〇〇〇 | 同 |
| 計 | 會社數 | 四、七〇〇、〇〇〇 |

本店ヲ有スル合名會社

- | | | |
|--------|---------|----------|
| 業別 | 資本金額 | 會社名 |
| 肥料製造業 | 三〇、〇〇〇 | 川崎肥料合名會社 |
| 煙草元賣捌業 | 二〇、〇〇〇 | 泉煙草合名會社 |
| 同木綿製造業 | 一五〇、〇〇〇 | 福清織物合名會社 |
| 同不動產 | 一〇〇、〇〇〇 | 福清織物合名會社 |
| 同有價證券 | 一〇〇、〇〇〇 | 寺田合名會社 |
| 同他保護 | 一〇〇、〇〇〇 | 寺田合名會社 |

和洋食及 一〇〇、〇〇〇合名會社木島屋商店

本店ヲ有スル合資會社

- | | | |
|--------|--------|----------|
| 業別 | 資本金額 | 會社名 |
| 木綿仲買業 | 二五、〇〇〇 | 岡田合資會社 |
| 有價證券買入 | 三〇、〇〇〇 | 合資會社虎野商店 |
| 計 | 會社數 | 二、〇〇〇 |

支店ヲ有スル諸會社

- | | | |
|-------|-----------|-----------|
| 業別 | 資本金額 | 會社名 |
| 煉瓦製造業 | 七〇〇、〇〇〇 | 大阪黨業株式會社 |
| 銀行業 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 株式會社不動貯金 |
| 有價證券 | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 銀行 岸和田支店 |
| 產不動態 | 五、〇〇〇、〇〇〇 | 日本勸業株式會社 |
| 受託業 | 五、〇〇〇、〇〇〇 | 岸和田支店 |
| 石材販賣業 | 一五〇、〇〇〇 | 關西石材株式會社 |
| 鑛業 | 一〇〇、〇〇〇 | 山下鑛業株式會社 |
| 關スル業務 | 一〇〇、〇〇〇 | 岸和田支店 |
| 銀行業 | 六、〇〇〇、〇〇〇 | 株式會社四十三 |
| 計 | 會社數 | 三、一五〇、〇〇〇 |

第四章 著名な工場

關西製綱株式會社

本會社は明治四十五年四月一日の創立にして、元貝塚製綱所主業師徳松氏現本社(常務取締役)の發起にて貝塚町の有志等出資して資本金拾五萬圓を以て「ニラロ」製造販賣の目的を以て創立し大正六年六拾萬圓に増資し「ワイヤ」工場を増設し毎期相當の成績を納め堅實なる發展を遂げ現在の資本金は百五十萬圓にして今や關西製綱株式會社の名海内に轟き海軍省指定工場となつた

取締役社長 寺田元之助
専務取締役 藥師 徳松

取締役 寺田松三郎 久住政七 中川英彦 笹村竹造 支那人 寺田榮一 監査役 岡田惣吉 十場吉太郎 岡本康太郎 相談役 寺田甚與茂 寺田元吉

岸和田煉瓦綿業株式會社

當社は明治十六年夏の旱魃及び明治十八年梅霖季の大洪水にて五穀稔らず男女其の職を失ひ飢渴に泣く細民救済の目的を以て工業に熱心なる寺田甚與茂、金納源十郎外數名相計り煉瓦製造の適當なるを看破し明治二十年七月七日資本金貳萬五千圓を投じ第一煉瓦製造會社を創立し敢て利を求めず専ら地方窮民をして就職せしめ其の窮境を救ふを目的とし營業を開始したのである、其の後明治二十六年十一月岸和田煉瓦株式會社と改稱したが時代の進運に伴ひ煉瓦の需用は長足の増加を見るに至り逐次増資を成し明治四十年三月資本金參拾萬圓とし最新式機械を米國より輸入して据付け且つ燒窯を改良し其の能率の増進に努め製品を優良にし價格を低廉ならしめたる結果一時經濟界の沈淪振はざる時と雖も何等影響を見ず信用日に確實を加へ、需用は益々増加した大正四年八月専務取締役辭任したるを以て社長寺田甚與茂氏は大綱を總攬し専務取締役に金納源十郎就任し終始一貫業務を執掌する事となつた、時恰も我煉瓦界は最も不況時代なるにも拘はらず社員職工を激勵し事務を整頓し一致協力其の難に堪へて社運の隆興を圖りつゝ、あつた際恰かも歐州戰亂の結果我諸工業の大物興を來し煉瓦の需用は俄かに激増し従て價格日々昇騰し賣行活潑となり在品を一掃するの好況を呈したので、多々需用に應ずるの目的を以て附近磯の上に分工場を設置し大に業務を擴張すると共に益々製品改良能率増進價格低廉を計り更に

綿業界の有望を期し大正八年七月資本金壹百萬圓に増加し岸和田煉瓦綿業株式會社と改稱し同時に磯の上棟瓦部分工場隣接地に織布工場を設置し現に輸出綿布並に別珍を製織販賣し斯業界の雄を以て稱せられつゝある

第五章 漁業

本市一帯の沿岸は由來魚族に富み其の收穫も亦尠ならず往古に於て住民の過半は漁業兼業として生計を営みたるやうであるが、近來工業の發達に連れて漸次減少の傾向を生じた而して漁業法は打瀬、地網、巾着網、桁網、流網等を主とし殊に打瀬は當地獨特の漁法である、打瀬は永録三年阿蘭陀船一隻觀光のため紀州沖に投錨した際當市の漁夫同船監視の命をけて出動したる時の發見に係る漁法であつて先年米國より本邦に於ける漁獵法に關して大阪府に其の取調方を囑托し來りたる際本市は打瀬網の模型を造りて出品し名聲を博した事がある

漁獲物の種類は鯛、鰯、鰒、蟹、蛸、鰯、烏賊、鱧、牛の舌、アナゴ、太刀魚、鰯、鱈、鯖、アジ等でこれ等は間屋を経て仲

買入に渡り過半数は本市及び近郷の需用を充たし餘は堺或は大阪に搬出し蝦は干製して遠國に送るのが普通である、年收總額貳拾餘萬圓を降らず殊に遠洋出漁獎勵として大阪府より補助を受け遠く朝鮮近海に出漁する者も一ヶ年平均五六艘にして收穫壹萬圓を算して居る、明治三十六年三月岸和田漁業組合を組織して同一步調の下に漁業に従事し斯業の改良發達に努めて居る

第六章 商工業機關

大正十年五月一日現在

本市には商工會一、漁業組合一、信用組合、其他準則同業組合と同すべき者十九ある、今其名稱を列記すれば左の如くである

名稱	名稱
漁業組合	米穀商組合
薪炭商組合	菓子商組合
農商組合	人力車夫組合
古物商組合	履物商組合
質商組合	材木商組合
料理商組合	馬力組合
酒商組合	蒲鉾商組合
洋服商組合	運送業組合
石炭商組合	理髮業組合
湯屋業組合	石工組合



第四編 運輸及交通

第壹章 道路及橋梁

本市を南北に貫通せる道路を國道第十六號と稱し牛瀧岸和田線外八線の府道と百

八十五線の市道及び二十三個の橋梁により本市内の交通が整理されて居る、各道の延長と其の起點、終點、鐵道及び橋梁名を左に掲記する事とした

道路

路線名	延長		起點及終點
	町	尺	
國道第十六號線	二町	一八尺	自大阪市至和歌山市
府道牛瀧岸和田線	一七町	二二尺	自岸和田市至和歌山縣
同岸和田停車場線	二二町	一五尺	自岸和田市至和歌山縣
岸和田港線	三三町	一六尺	自岸和田市至和歌山縣
同伯太岸和田線	六〇町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣
岸和田港南線	一四町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣
同岸和田停車場線	四〇町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣
同岸和田停車場線	四〇町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣
同岸和田東葛城線	三〇町	一六尺	自岸和田市至和歌山縣
同岸和田木島線	五〇町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣
市道第百八十五號	三町	一〇尺	自岸和田市至和歌山縣

橋梁

橋名	橋質	長	幅	竣工年月	川名	橋名	橋質	長	幅	竣工年月	川名
寺前橋	石	三〇	四	大正六年九月	寺前川	清右衛門橋	石	三〇	四	大正十年十月	清右衛門川
干橋	石	三〇	三	大正七年十月	干川	成見橋	石	三〇	三	大正十年十一月	成見川
菊右衛門橋	石	二八	三	大正二年四月	菊右衛門川	大池橋	石	三〇	三	大正六年四月	大池川
勘太橋	石	二五	三	大正七年七月	勘太川	野田池橋	石	二〇	三	大正六年八月	野田池川
永守津橋	石	二五	三	大正七年七月	永守津川	砂町橋	石	二〇	三	明治四年三月	砂町川
舟津橋	石	二五	三	大正七年七月	舟津川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
中古城橋	石	二五	三	大正八年八月	中古城川	中道橋	石	二〇	三	明治四年三月	中道川
東雲橋	石	二五	三	大正八年八月	東雲川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
天神橋	石	二五	三	大正五年九月	天神川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
大前橋	石	二五	三	大正六年四月	大前川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
新前橋	石	二五	三	大正六年四月	新前川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
西新橋	石	二五	三	大正六年四月	西新川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川
新屋橋	石	二五	三	大正六年四月	新屋川	新道橋	石	二〇	三	大正十年二月	新道川

鐵道

會社名 區 別 停車場數 哩數
 南海鐵道 鐵道 二 二哩半
 株式會社 電車併用

第貳章 鐵道

大阪市難波を基點とし堺市其の他の名邑を経て和歌山市に達する鐵道を南海鐵道と稱し南海鐵道株式會社の經營である、同鐵道は明治三十一年十月堺市佐野町間の敷設を終り續いて佐野町和歌山市間の線路完成を告げた、本鐵道の開通に依り本市の交通は大阪、堺と將た和歌山に頗る便利となり土地の發展に貢獻せる處實に多大なるものあるは謂ふまでもない、最近に於て南海急行電氣鐵道は大阪濱寺間の敷設権を獲得し濱寺より本市を経て和歌山市に通ずる敷設権も遠からず認可せらるゝ模様である、此の鐵道にして開通せば南海鐵道と相俟つて一層本市の交通を便にするや明である、尙ほ本市を基點として泉北郡牛瀧に通ずる電氣鐵道も敷設の計畫がある之れも近き將來に於て實現し本市と附近町村との交通の便を増すべく期待せられて居る

第參章 港灣

岸和田港は本市大北町地先にあり東經る反三十五度二十三分北緯三十四度二十七分に位して居る、港形は恰かも曲尺を横へたるが如き形をなし、廣袤水面五千三百坪ある、本港は岡部氏の藩政時代に修築の端を開いたもので、之を舊記に徵するに魚の店川尻(古城川)船入塙繪圖面(文政十二年製圖)に左の如き添録がある、當船入川口者元蘆原に而船掛り塙無之處、寛政三年亥年八月高浪に而人家土藏等流失船置塙もなく之に付浦奉行伴丈左衛門に砂留被仰付加之救難船助人命爲繁榮魚の店川尻に築波濤和泉屋利兵衛持新田堀便爲船人塙雖然纔に三年

べ川に埋れ不能船出入所々不知及大破他邦船々急風之馳來及破船不少依之文化十四年六月地方役舟坂久兵衛若林喜右衛門西村權之右衛門江船再普請掛り被仰付候處人氣相競ひ年を不越而普請出來大船入津使爲繁榮戴星出入の功顯然希修覆屢急情而已

第四章 馬車自動車

本市南海鐵道岸和田驛を基點とし泉南郡有真香村字川合に至る一里三十四丁間を一日五回往復する馬車二臺と岸和田驛を基點として泉北郡山瀨村字内畑六哩半間を一日十回往復する自動車三臺あつて通交に便して居る

第五編 教育及宗教

第壹章 教育

第壹節 沿革

當町に於ける現在の教育機關は府立中學校一、高等女學校一、市立尋常高等小學校一、同尋常小學校三、市立幼稚園一、私立幼稚園一、私立尋常小學校一、私立

實業補習學校一である普通教育の沿革に就ては徳川氏の治世に於て舊藩主岡部氏が藩士の子弟を教育すべく講習館を設け修武文學の部門を置きて教育に従事せしが廢藩置縣後更に藩學校と改稱し泉漢洋の三學を授けた、然れ共之れ等は一に藩士の子弟のみに限られ一般子弟の教育は

全く等閑に付せられしも明治五年學制發布せられてより藩學校を區學校と改稱し初めて一般の子弟を就學せしめ、同六年五月區學校を小學校と改稱し同七年五月舊大手門に校舍を設けて公立岸和田小學校と稱した

明治二十一年九月に至り高等科を併置し元四箇町村學校組合を設けたるも同三十五年三月に至り組合解散の結果一町村一校の制を執り四校に分離して岸和田尋常高等小學校、岸和田濱尋常小學校、岸和田城内尋常小學校、沼野村尋常小學校を設立し

明治四十二年四月に至り各小學校に高等科を併置したが四十五年三月に至り城内濱、沼野村の三高等科を廢し一校に併合し以て今日に至つた

明治四十五年一月四箇町村を併合して岸和田町の成立するや學務委員十名を設けて教育行政上の諮問機關とした

第貳節 公立中小學

(附幼稚園)

岸和田中學校 (岸城町)

明治三十年三月大阪府第六尋常中學校設

立を告示し同四年四月創立同年五月開校同三十二年四月大阪府第六中學校と改稱同三十四年四月岸和田中學校と改稱して現今に至つた

泉南高等女學校 (野田町)

明治三十四年四月創立大阪府泉南郡立泉南高等女學校と稱し同年六月開校大正四年四月大阪府に移管し大阪府立泉南高等女學校と改む

岸和田尋常高等小學校 (堺町)

舊藩校講習館の後身にして明治六年五月小學校と改稱同七年五月公立岸和田小學校と改稱同二十一年九月高等科位置

岸和田濱尋常小學校 (紙屋町)

明治三十五年三月元四箇町村學校組合解散後假教室を設けて開校同四十二年四月高等科を併置し岸和田濱町尋常高等小學校と改稱同四十五年一月高等科を廢し同年四月岸和田濱尋常小學校と改稱した

岸和田城内尋常小學校 (岸城町)

明治三十五年四月創立開校、同四十二年四月高等科併置、同四十五年四月高等科を廢し岸和田城内尋常小學校と改稱

岸和田朝陽尋常小學校 (上野町)

岸和田幼稚園

明治三十五年四月創立沼野村尋常小學校と稱す、同年十一月朝陽尋常小學校と稱す、同四十二年三月高等科併置、同四十五年三月高等科を廢し岸和田朝陽尋常小學校と改稱、大正七年上野町新築校舍落成に付移轉

第參節 私立學校

私立岸和田實業補習學校 堺町

明治三十一年一月當町有志者間に思成會の組織成るや實業補習學校設立を議定し同年六月知事の認可を得て創立せり教授科目は修身國語算術商業の四科目を撰び夜間教授をなし以て今日に至つた

私立修齋尋常小學校

當校は岸和田紡績株式會社の職工にして學齡兒童の義務教育未了者に對し從業の餘暇を決て普通學を教授すべく小學校令に基き大正元年十月を以て創立し専任教師として本科正教員一人補助として社員

十人それが教授の任に當つて居る

第二章 宗教

當町は紀州高野山に接近せる地理的關係より己往に於て佛教中眞言宗最も勢力を有せしが足利氏の末世に至つて戦亂相繼ぎ住民は其の生を安んずる能はず寺院の如きも一亂に遇ふ毎に或は兵火に罹り或は破却の厄を蒙り昔日結構壯麗を極めたる堂宇も今は空しく草廬中の礎石に其の名残を留むるのみであるが、就中根來草亂は當町をして全く其の渦中のものたらしめ一切の舊記等は之れが爲め擧げて破滅の厄に遇ひしが之等の争亂は單に物質的方面に一變化を與へたるのみならず精神的方面にも多大の影響を及ぼし昔日の勢力ありし眞言宗も其の堂宇と共に廢頽し其の後淨土宗の流布せられてより殘存せる寺院も轉宗して以て現今の結果となつた、之れ眞言宗が説くに深遠なる教理を以てするに反し淨土宗の單純なる念佛唯一他力本願主義が當町の民心に適合したるも亦其の原因の一と信せらるゝ、現存せる淨土宗其の他の寺院の中境内に天照大神及び八幡大菩薩を祭れるは嘗て眞言宗であつた顯著なる證據である

佛教に關する沿革は如上の如くなるも明治十一年七月に至り京都同志社校長新島襄氏が當町に於て其の教理を説きたるを初めとし岸和田基督教會天主教會、日本聖公會等相踵ぎて設立せられ信徒も日逐ふて増加するに至つた
天理教は明治三十一年八月府廳の認可を得て下野町に分教會を設立し其後大津支

教會泉岸宣教所名草分教會名泉宣教所設立された
金光教は明治二十七年九月に於て岸城町に岸和田教會所を設立してより以來相當の成績を収めて居る
以下寺院教會信徒數及び其の沿革を畧叙する

寺院	教會	寺	院	教會	會
宗	教	別淨土宗	濟眞	宗曹	洞眞
言日	蓮基	智天	理金	光	
寺院教會數	七	三	二	一	二
信徒數	一、四二二	三三三	三三〇	五二	一九一
	四八〇	一六六	四〇一	九六	

正覺寺 宮本町

摩頂山と號し淨土宗鎮西派に屬し往古は眞言宗にして摩頂山圓通寺智光院と稱せり天正十三年根來争亂のため堂宇悉く破却されしが、慶長年間に及び再建して正覺寺と稱す開基は詳かならず、現今は春木西福寺の末寺である

淨光寺 沼町

天頂山と號し淨土宗鎮西派に屬す由緒に關しては記録に存するもの無いので不明である、春木西福寺の末寺である

本徳寺 五軒屋町

鳳凰山と號し臨濟宗妙心寺派に屬す當町は元泉南部麻生郷村大字鳥羽に在りて鳳凰山海雲寺と稱し明智光秀の開基であつたが後兵火に罹り寛文五年現今の處に建立す開山南岳和尚と光秀の木像を安置してある、臨濟宗妙心寺の末寺である

來迎寺 下野町

紫雲山往生院と號し淨土宗鎮西派に屬す當町は始め眞言宗なりしも開基等に關しては詳細を知ることが能きない、春木西福

寺の末寺である

波羅寺 下野町

本寺は元日根郡南近義村大字橋本の波羅寺が移轉せしもので寛保元年廣慶列和尚によりて開基せられた、臨濟宗に屬し妙心寺の末寺である

淨圓寺 北町

長谷山と號し記録がないので開基等は不明であるが傳説によれば小田秀政の臣長谷某なる者佛門に入りて慶長年間に當時を建立せりと謂ふ岡部氏の岸和田に封せらるゝや崇信淺からず護國院として參拜した、眞宗西本願寺派である

光明寺 南町

遍山攝取院と號す開基不明なるも當寺は元岸和田の北に在りしを天龜二年に至りて泰譽上人により現今の處に建立されたと謂ふ淨土宗に屬し智恩院の末寺である

天性寺 南町

護持山朝光院と號し淨土宗鎮西派に屬す傳説に本尊は素と岸和田城内に在つたが元龜三年泰山和尚現今の處に勸請したものであると、本尊は岸和田城の守護佛と

して城主の崇尊深く神秘的傳説の傳はるものにして足らぬ、本尊は蛸地藏菩薩を安置し淨土宗智恩院の末寺である

梅溪寺 南町

香峯山と稱し舊藩主の祖岡部長盛公の室(徳川家康の女)を祭る延寶五年八月岡部氏當寺を建立し鐵外和尚を以て開基とす曹洞宗に屬し下野國大申寺の末寺である

圓城寺 中町

長泉山と號し眞宗大谷派に屬す信濃國の人加藤主計眞宗に歸依し天文五年に當寺を建立したものであると言傳へられて居る

觀藏院 宮本町

受樂山淨聖寺と號し醍醐派に屬す開基は不明なるも所藏の觀世音木像は古代のとして考古の參考品である、三寶院末寺である

藥師院 宮本町

瑠璃山と號し眞言宗御室派に屬し仁和寺の末寺にして開基は不明なり本尊は俗に梅藥師と呼び舊藩主岡部氏の祈願所である

西方寺 五軒屋町

經心山歸命院と號す元録年間火災に罹り記録等一切烏有に歸したるも文化六年秀譽上人に依りて中興せりと謂ふ、淨土宗西福寺、智恩院の末寺である

十輪寺 野田町

佛頂山と號し臨濟宗妙心寺に屬し播州門龍寺末である、當寺は素と東光寺の寺蹟にして東光寺は織田信長のために破却せられしを以て藩主岡部長著公之れを惜み元文四年當寺を建立して圓宗妙覺禪師を開祖となす長著公の遺骸を當寺に埋葬し證名を十輪寺院殿と謂ふ、寺號は是から起つたのである

圓教寺 五軒屋町

聖護山と號し日蓮宗一致派に屬し本國寺の末寺で慶長五年岸和田城主小田秀政の建立に係り日仁和尙を招きて開祖とす

本昌寺 五軒屋町

妙光山堯花院と號し日蓮宗一致派に屬す寛永五年日受和尚を招きて開祖とす、本國寺末である

一唱庵 宮本町

浄土宗鎮西派に属し開基不明なり文政四年秋中興し徳本和尚を以て其祖とす智恩院末である

日本聖公會岸和田教會南町

明治三十二年九月米國神學博士シ、エムウキリアム大阪及び堺市に布教の傍ら毎週邦人傳導者を派して布教せしめ居りしが同三十四年七月教會設置の認可を得て本教會を設置した

天主教聖ミカエル教會

(筋海町)明治十九年大阪市北區富島町天主教會の附屬として教會を建設し同三十九年専任教師を置く事となつた

金光教岸和田教會所岸城町

明治二十七年九月認可を得て並松町に於て布教を開始せしが大正元年十月火災に罹りたるため現今の場所に移轉したり

岸和田基督教會 岸城町

明治十一年七月京都同志社校長新島襄氏が始めて當町に於て教理を説きたるより同十八年九月信徒十五名を以て教會を組織し同四十年並松町に會堂を新築せしも維持上日本基督教傳道會社の補助を受け

居りしが現今は自治獨立し岸城町の和泉水力電燈會社跡に移轉し鶴巢園と改稱した

名泉宣教所 大工町

天理教敷島大教會名草分教會に属し、明治二十三年の秋堺町に假集談所を設けて布教を開始せしが同三十五年十二月認可を得て同四十一年六月大工町へ移轉した

泉岸宣教所 大北町

天理教中河大教會大津支教會に属し、明治三十三年魚屋町に於て布教所を設置し同三十四年六月認可を得て大正六年五月大北町に移轉した

泉南分教會 下野町

天理教郡山大教會に属して居る、初め信仰の者餘暇を以て天龍講々元と稱し出張所設置してあつたが明治三十一年八月認可を受けて今の名稱に改めたものである

第六編 官公衙及團體

第一章 官公衙

本市は和泉南部の中樞地にして行政司法其の他の官衙の所在するものが尠くない今左に表示す

名	稱	所 在
泉南郡	役 所	岸 城 町
岸和田區	裁 判 所	岸 城 町
岸和田	稅 務 署	岸 城 町
岸和田	警 察 署	本 町
岸和田	郵 便 局	本 町
岸和田	下野町郵便局	下 野 町
大阪府	土木課出張所	岸 城 町

第二章 團 體

岸和田市教育會

大正九年二月十五日の創立にして、會長奥三代松、副會長井上洸、幹事田中義者田中良一等にして本市教育の向上發達を圖るを目的で組織されたものである、事

務所は岸和田小學校にあり、會員は六十六名賛助員百五名を有す明治二十九年頃互友會なる名稱の下に組織せられしも其の後次第に盛になり明治三十年一月時の大阪府知事西村捨三の題字に因みて遂に思成會なる名稱を改める、事務所は北町にありて幹事は寺田元之助、中田九一、山崎秀四郎等で其の目的は地方自治の發達を計るにあり其の事業の一部として岸和田實業補習學校を經營し補習教育を授け本市教育界に貢献して居る

社團法人 永代々巴講

事務所は本町にあり大正七年五月八日の創立にして理事高井泰造、金納庄七、山西清右衛門等で、其の目的は敬神尊皇精神の養成にして田地九反一畝十一歩畑三畝二十三歩野原二十五歩建物二十坪五合を有し、會員二百二十三名である

公友會

其の所在地は並松町にあり大正九年三月一日の創立にして會長は堺安之助、副會長松原寅次郎等で會員は九十七名其の目的は會員相互の親睦を計るにあり財産三百一圓八十錢を有す

互友會

其の所在地は五軒屋

町にして明治四十四年九月の創立會長宇野亮一、副會長佐野馬太郎等である會員は八十六名にして其の目的は會員の意志の疏通を計り相互の親睦に資するにあつて基本財産四百二十九圓を有す

北町會

其の所在地は北町にあり大正九年三月十日の創立で、會長は内田彌七會員二百十名を有し其の目的は會員相互の親睦を計るにあり貯金は三千二百五十圓を有す

岸和田商工會

大正七年六月の創立にして會長は中村宇一郎、副會長佐野馬太郎、辻本由松等で會員は三百五名、其の目的は地方商業の發展を計り公共事業に盡すにある

泉南婦人修養會

岸城町に會場を置き大正七年六月の創立にして會長は佐藤ツキ、理事松本榮、山岡ハル、寺田百合等で會員は八十五名其の目的は婦徳修養の機關とするにあり基本金十五圓を有す

誠友會

本町に會場を置き明治四十年六月の創立に係り代表者は稻葉

辰一、貫野楠之助、西出新次等會員十一名にして其の目的は會員相互の親睦を計り公共事業に盡すにあり、基本金五百圓を有す

北町青年團

其會場を北町に置き大正十年二月の創立にして會長井上洸、役員は岸勘三、山本政一等で會員は六十名其の目的は青年の修養にある

下野町青年團

其會場は上野町にあり大正五年の創立にして會長は須田楠之助、副會長奥與三兵衛なり會員は四十八名あり其の目的は青年の修養及び自治的精神の涵養を計るにあり基本金三十圓を有す

千歳青年團

其の會場を宮本町に置き大正九年一月の創立にして會長奥利久で會員九十八名其の目的は青年の修養にある

岸和田母の會

其會場は城内に置き大正七年十月の創立にして田中義者、鳥居すみ、松本榮子、田代シヲ、堀江親等幹事たり會員二百名其の目的とする處は婦人の天職を完するにあり基本

金百三十圓を有す

中の濱軍事青年團

其の會場を中濱に置き大正十年二月十三日の創立にして會長河合澄夫、副會長金納又榮、笠原嘉一郎等である會員百四十三名、其の目的は民力涵養風俗改善物品販賣等なるにある

中北親交會

中北町に會場を置き大正八年一月の創立にして會長は松谷徳松、鶴原榮次郎等にして會員四十四名あり其の目的は會員相互の親睦及び社會公共事業に盡すにある

紙屋町誠進會

紙屋町に會場を置き大正十年二月の創立にして會長西ノ内房吉、宇野徳太郎等で會員七十五名を有し其の目的は會員相互の親睦を計るにある

岸城正徳會

上町に會場を置き大正元年八月の創立にして會長は木岡楠太郎、岸田嘉一郎等にして會員二十六名其の目的は青年の修養にある

筋海町尚義會

筋海町に會場を置き大正十年四月の創立に係り役員、

川崎才次郎、笹島庄十郎等にして會員百五名を有し其の目的は會員相互の親睦及び修養にある

沼町青年團

會場を沼町に置き大正十年五月の創立にして會長根來定治、中野力松等にして會員七十名を有し其の目的は青年の精神修養にある

筋海町青年會

會場を筋海町に置き大正十年六月一日の創立で會長は白井官太郎岸田良太郎等にして會員六十名を有し其の目的は青年の精神修養にある

五軒屋町青年團

會場を五軒屋町に置き大正十年九月の創立にして

第七編 財政及經濟

第一章 財政

往年分立せる四個町村を合併して岸和田町成立し町制を實施し發展の基礎を造つたが、町長村田宜寛は消極政策を執り新事業はこれを見て財政の緊縮を圖り以て住民の負擔を軽減し銳意財政の基礎を鞏固にすべく努力した、且つ町内には岸

和田紡績株式會社を初め夥多の大會社、銀行などの所在するものが多く町費の大部分はこれらの會社、銀行の負擔する處となつて居るので、今次市制を實施し其の結果上下水道、港灣の改修、道路の整理、社會事業及び衛生機關の施設其他新興都市として施設經營すべきもの多く隨つて市費の膨脹を來たすとしても財政

上には何等の懸念もない、之を要するに財政の基礎鞏固なることは全國都市中稀に見る處である、今最近の調査にかゝる資力、財産表を掲げて以て其の虚ならずる事を證するであらう

市有財産調

其ノ一

種別	金額	管理方法
現金ノ部	大正十年五月一日現在	
市基本財産	四〇八、一〇五	五十一銀行預金
小學校基本財産	四〇八、〇〇〇	五十一銀行預金
幼稚園基本財産	六四、〇〇〇	五十一銀行預金
宮内教育事業基金	五九九、四七〇	五十一銀行預金
高齢者慰安基金	四六、〇〇〇	五十一銀行預金
救濟基金	二、三三七、八一〇	信用組合預金
特別準備基金	六、〇五八、七四〇	五十一銀行預金
計	九、八二二、一二五	

市有財産調

其ノ二

有價證券ノ部

大正十年五月一日現在

幼稚園基金	五分利公債	一〇〇	甲種國債登錄
本園基金	貯蓄債券	一一〇	五十一銀行保護預

資力表

諸税並市税	市有財産	負債
國稅	現金	公債證券
府稅	等券面餘積	耕地
市稅	土地	地
現金	山林	建
九、八三三	物米穀	金高米穀
二〇、六八八	一、三、七九	一
一〇、六八八	九、九	一

種別	證券ノ種類	券面金額	管理方法
市基本財産	四分利公債	七〇〇	甲種國債登錄
市本財	五十一銀行株券	一、二五〇	五十一銀行保護預

小學校	幼稚園	本基	本財
四分利公債	二、八〇〇	甲種國債登錄	
五分利公債	五五〇	五十一銀行保護預	
勸業債券	五〇	五十一銀行保護預	
貯蓄債券	五	五十一銀行保護預	
大阪農工銀行株券	四〇〇	五十一銀行保護預	
五十一銀行株券	一、二五〇	五十一銀行保護預	
岸和田煉瓦細業株式會社株券	一、八〇〇	五十一銀行保護預	

宮内教育 五分利公債 一四、二〇〇 壹萬壹千貳百圓甲
 事業基金 五分利公債 一、二〇〇 種國債登錄參千圓
 高齡者慰 五分利公債 一、二〇〇 五十一銀行保護預
 安基金 計 二四、四一五

市有財産調 其ノ三

大正十年五月一日現在

建物ノ部	坪	數
種別		
役場	九、五〇〇	
小學校	二、〇三〇、〇二五	
幼稚園	八四、五〇〇	
隔離病舎	二八二、七〇〇	
健康隔離所	八九、〇〇〇	
火葬場	一三三、〇〇〇	
消防器具藏置所其他	二九、二〇〇	
計	二、七三九、九二五	

本市は舊藩政時代より僅かに小規模なる取引行はるゝのみで
 これが補助機關たる兩替店なども、他地方に比すれば極めて

第貳章 經濟

業別、資本金額、會社名は左の如くである

業別	資本金額	會社名
貯金其他普通銀行業務	二〇〇,〇〇〇	株式會社岸和田貯蓄銀行
同	上 7,000,000	和泉貯金銀行
同	上 1,000,000	同 不動貯金銀行岸和田支店
普通銀行業務	上 5,000,000	同 五十一銀行
同	上 2,000,000	同 寺田銀行
同	上 6,000,000	同 四十三銀行岸和田支店
計	三三,996,000	岸和田信用組合



社會業綿瓦煉田和岸

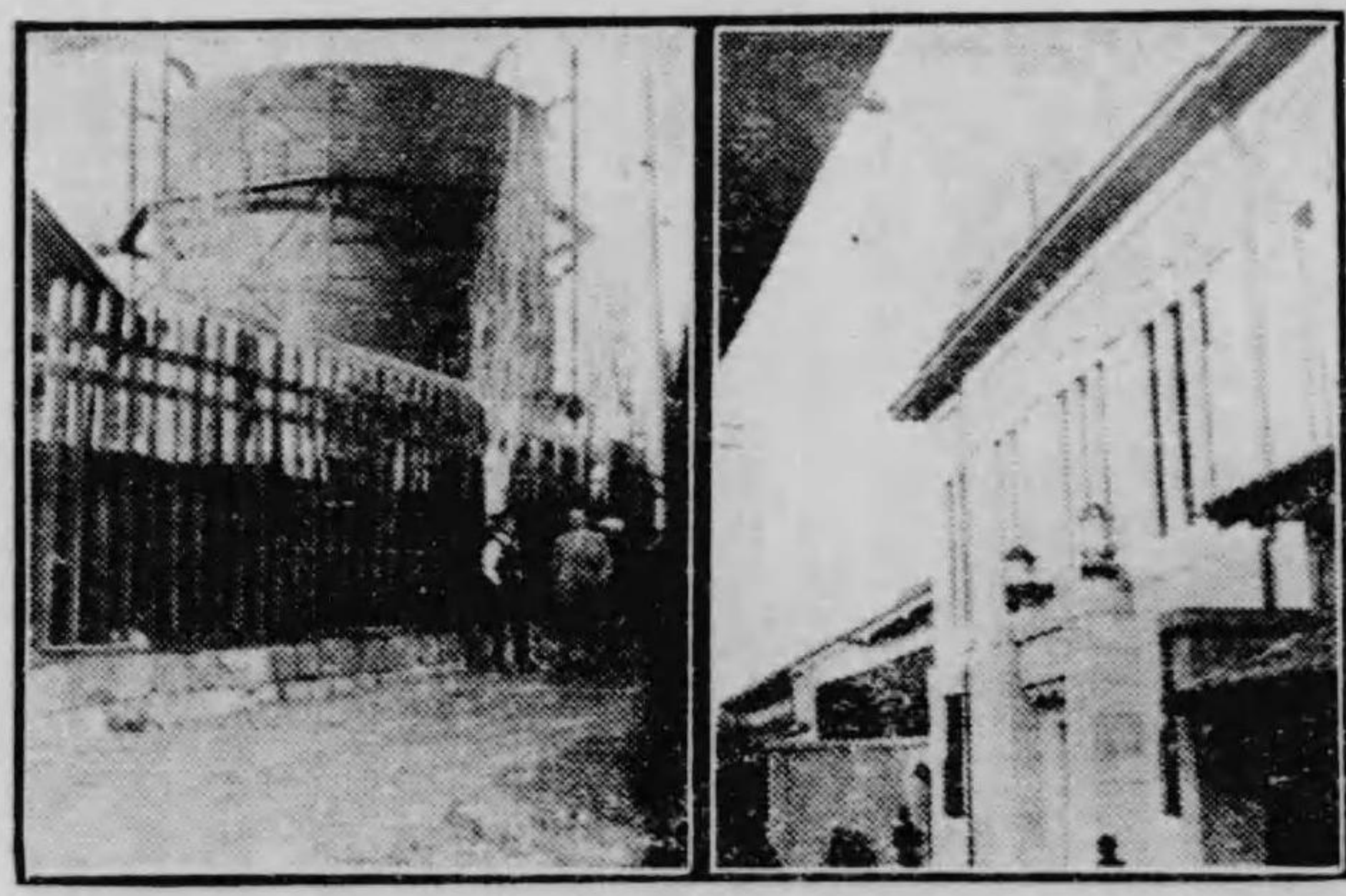
第八編 神社及名勝

第壹章 神社

郷社岸城神社

祭神素盞鳴尊 合祀品陀別命

和泉誌
 城濠祠在岸和田村
 傍有佛像勤日正平
 十二年造 後慶長
 年間に於て時の城
 主小出氏品陀別命
 を合祀し岸和田城
 の鎮守として世々
 城主の崇信深く明
 治維新に至り岸城
 神社と稱し後郷社
 に列した
 編者想ふに和泉誌
 所載の城濠祠在岸
 和田村は岸城神社
 に現存せる古釜に
 徴して既に正平十
 二年に牛頭天王社
 として存在せるは



社會斯瓦田和岸 行銀一十五田和岸

争ふ可からざる事實である
 加ふるに牛頭天王の發神が素盞鳴命なる事に於て益々此想定を確信せらるゝのである、然るに泉州牛頭天王神社記中に泉州南郡沼村の邑長沼某が某信仰する城州八坂郡の品陀別命を正平十七年に於て勸請したる由記載しあるも之

村社菅原神社

祭神素盞鳴尊

合祀天照大神并丹市村杵島姫命 品陀別命菅原道真公

を位置より推察するも村社菅原神社ではないかと思はるゝ、又邑長沼某が自己の所領を離れて殊更岸和田村に勸請するの理由も無いのである、此推斷に基きて泉州牛頭天王神社記所載を村社菅原神社の縁起とす方當れりと信ず、要するに岸城神社は菅原社より實に五年以前に於て其存在を認め得べく記して以て參考に資する

本社の由緒に關しては詳かでないが傳ふる所によれば正平十七年三月の創立にして後村上天皇の御宇に當り泉州南郡沼村の邑長沼將監が其の信仰する處の城州八坂大神を庭内の淨池に勸請したるものにして今を去る事實に七百有餘年の昔である(泉州牛頭天王神社記參照)然に足利氏の嘉吉年間に至り兵火に罹りて一切の舊記等を失ひしも其の後再建せられて沼天神社と稱し並松町と沼村との氏神たりしが神社明細帳調製の際誤て菅原神社とし

第 貳 章 名 所 舊 蹟



泉 州 紡 績 會 社

て届出で今日に至つた 明治四十年より四十二年に涉り元別所村の熊野神社字宮辻の菅原神社字市杵島の市杵島神社大字上松の菅原神社大字加守の菅原神社字宮浦の八幡神社大字下松の勝尾神社の七社を合祀して村社に列した
熊野神社に關する舊記を徵するに和漢三才圖繪七十六に曰く
熊野社 在別所村
寛治四年白河法皇幸熊野歸程過此地田中生白蓮三莖勅其地建社祭熊野神
泉州志及泉州記にも同事項の記事がある

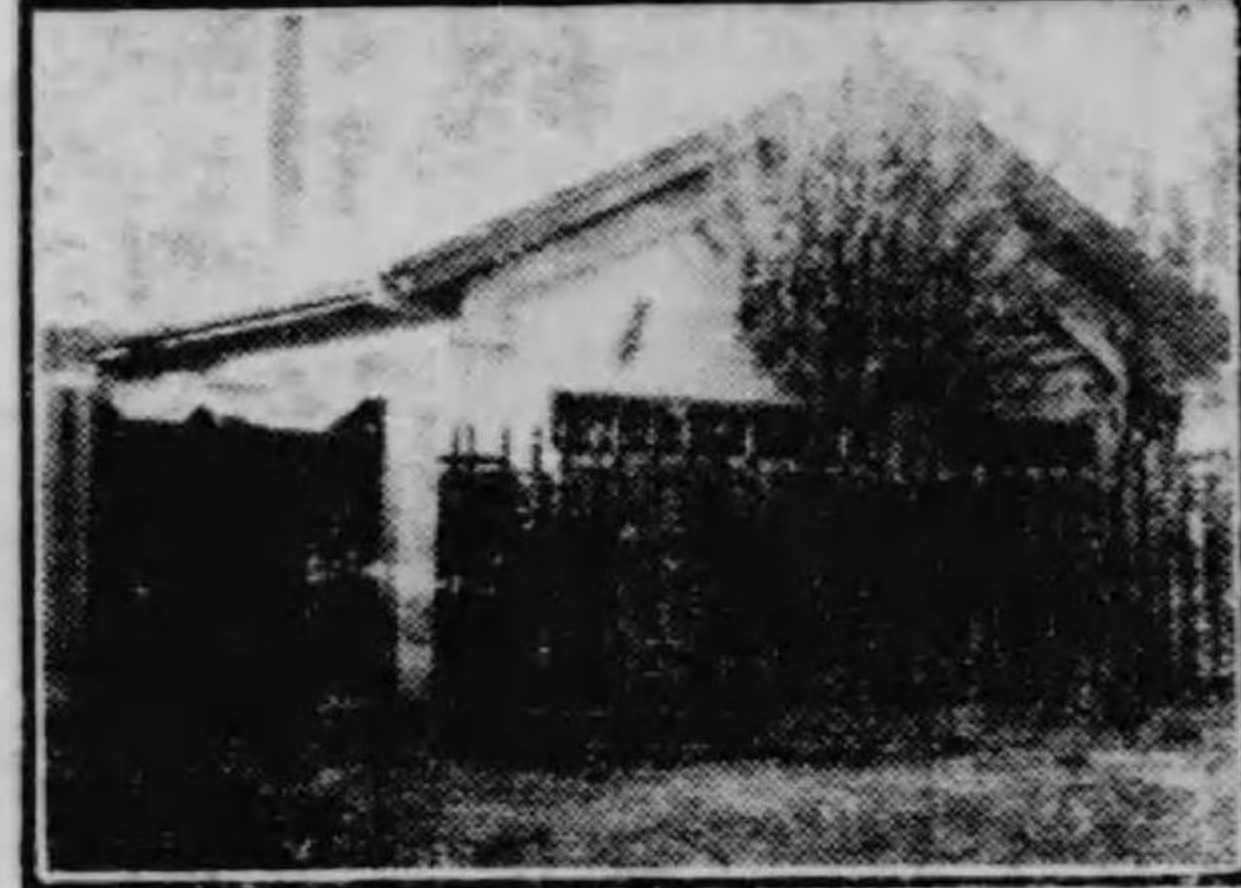
岸和田城趾 岸和田城址は字岸城町にあり元弘年中楠氏支族の築く所なりと云ふ本丸及二ノ丸等の地は往昔の形狀を存し三丸は現今概して宅地と化したる舊岸村と舊和田村との境界に在を以て或は岸城と云ひ或は和田城とも云ひ又岸和田城とも云ふ創築以來の年數久しく城主城代屢々迭り規模亦數回變更し斬壕石壘の如きは到底古式を存して居ない城臺に登り東に向ひて眼を放てば河内の金剛山と大和の葛城山と相持して相降らず南は葛城の山脈崗起伏し西は淡路の島影遙に清海の波に映すを觀る北は大阪灣を隔て、遠く攝津の摩耶山六甲山を雲間に見渡し山紫水明の眺望佳景敢て他の及ぶ所でない

古城跡 當町上町の東に在り方一丁餘元弘三年和田新兵衛高家和泉守たるや此地に居を構ふ礎石土草に埋もれて今尙存し輪廓歴然と殘つて居る



◆……む望を關主天城田和岸りよ端濠……◆

太神宮塚 當町沼町にあり舊記に謂ふ和田家の老臣沼伊賀守正信大内義弘と兵を交へて利あらず奮戦して死し此地に葬る時に



關西製鐵會社

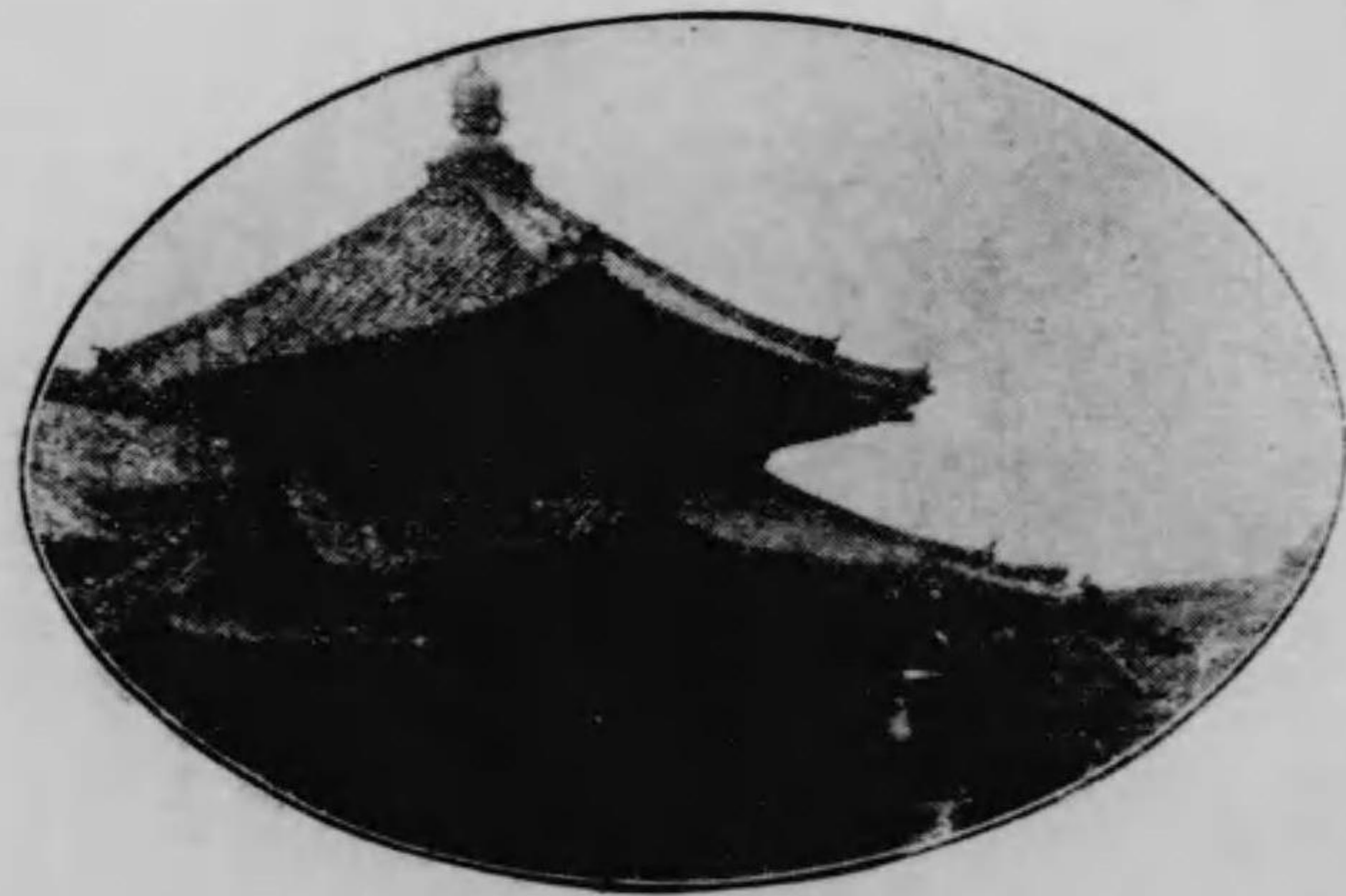
東洋麻糸會社

天正十三年三月十九日大徳院殿と諡す本塚は素と大將軍と稱せしも後誤りて太神宮塚と呼ぶに至つたものである

丸雙牛頭 當地上野町に在り口牌に云ふ豊玉姫命海濱の宮に於て彦斂尊を生み給ふや之に嬰せし調度胞衣其の他を舟九雙を以て此地に埋めたりと謂ふ今尙古家あり掃守郷よりの祭祀今に絶へない

宇佐の森 岸和田城の東南に在り和田家岸和田城を築くや遙かに九州の宇佐八幡宮を此地に勸請して社殿を建立せりと謂ひ傳られて居る

蛸地藏 當町南町天性寺に在り口牌の傳ふる所に依れば建武年中尊像大蛸の脊に乘りて出現せりと云ふ岸和田城守護神として城主の尊崇深く素と城内に奉置せられたりしを天保年間現今の所に勸請せり本堂は六間に七間半の廣さを有し、本邦有数の地藏堂にして縁日には男女の賽する者が多い



蛸 地 藏

泉州織物株式會社沿革

當社は明治四十年一月小巾木綿を動力織機に依り製造する目的にて資本金二十五萬圓を以て創設し直ちに個人經營の長瀧工場を買収し増臺の計畫と共に即時營業を開始し一面本社工場を建築し明治四十一年四月より小巾織機凡そ六百八十六臺を運轉し盛に内地向き綿布を製出し手織綿布を壓迫せしが其有利なるを認めたる他の機業家も亦た競ふて斯業を興すに至り遂に製品過剩の弊に陥り互に競争に堪へざるに至りしかば茲に着眼點を一轉して海外輸出に努力することとし大正元年十二月資本金を五十萬圓に増加し高石工場を新設し廣巾織機を据付け事業の擴張を斷行し綿、鮮、支、印、及濠洲方面向き綿布の製造を開始せしが初めは多少浮沈を免れざりしが世界大戰の突發に依り各地の注文翁然として至り到底其要求に應じ切れざるを以て大正六年一月本社及長瀧工場の小巾織機殆んど全部を賣却し更に最新式廣巾織機を据付けて盛に輸出品を製織して之に應ずると同時に資本金を倍加して壹百萬圓とし基礎の鞏固と營業上の安全を計る爲め更に原系自給策を

講じ紡機を英國ドブソン、エレド、パーロー會社に注文し資本金を貳百五十萬圓に増加し今や紡機二萬三千餘錠を運轉して其目的を達するに至る

今當社實力の一般を掲ぐれば左の如し

- 一 位置(本社)岸和田市南町一六〇番地
- 一 分工場泉南郡長瀧村一、二九七番地
- 一 同泉北郡高石町字高石南一四三六番地
- 一 資本金 貳百五十萬圓
- 一 敷地坪數、四萬六千五百五十四坪
- 一 建物坪數八千五百三十六坪
- 一 主要製品綿糸、綿布
- 一 織機臺數大巾一、一四二臺 小巾 三〇〇臺
- 一 紡機 二二、三〇〇錠
- 一 一ヶ年産額 約六百萬圓

取締役社長 寺田 元吉
專務取締役 島田 良藏
相談役 寺田甚與茂

岸和田紡績株式會社

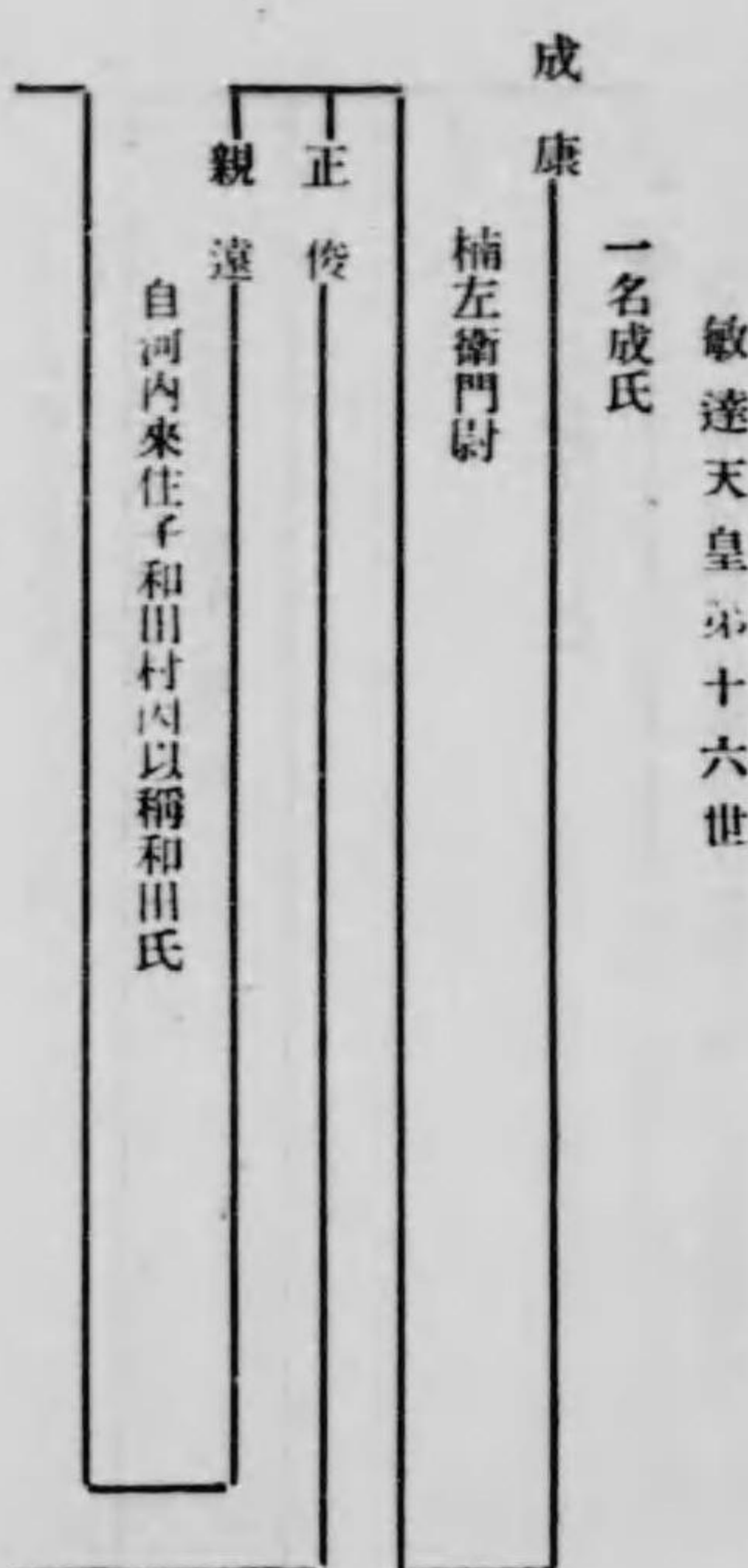
同社は明治二十五年十一月一日寺田甚與茂外二十四名の連署を以て知事に設立願書提出す明治二十七年一月二十日開業す資本金貳拾五萬圓明治二十八年七月十一日資本金を五拾萬圓に増加す同年九月第

二工場設置出願同三十年七月資本金を壹百萬圓に増加す同三十一年十一月陸軍大演習に際し先帝嘗地に御臨幸の際製品を天覽に供す同三十三年七月財界不況に際し六拾萬圓を減資す菊池知事工場視察に來る舊藩主岡部氏も來る同三十六年二月泉州紡績株式會社を買収し堺工場と命名す同三十七年四月泉州紡績會社より譲受たる戎印綿糸商標を特許局に於て登録相受く同年五月十二日清國に於て戎印商標權の確證を上海總領事館に出願す同三十八年三月資本金壹百拾萬圓に増加す第三工場設立出願同四十一年五月職工共濟組合を設置す同四十二年十一月〇キ印綿糸商標登録相受同四十三年二月第四工場設立野村分工場と命名同四十五年七月資本金二百四十萬圓に増加す第五工場設立、春木分工場と命名大正元年十月私立修濟尋常小學校認可せらる大正三年十一月大阪行在所に於て製品を天覽に供す今や岸和田紡績の威名海外に遠播其製品戎印の販路内國及支那南洋印度方面に行渡らざるなく而して同社によりて生活するもの壹萬人に及ぶと云ふ隆なりと云べし現在錠數十五萬四千八百錠

第八編人物

舊家和田氏

敏達天皇第十六世の後裔楠左兵衛尉橘左兵衛尉橘朝臣成康の次男太郎親達曾て河内より來り舊和田村に住む和田氏の始祖是なり。親達の系統は親達の子和田四郎高遠、高遠の子和田泉守正遠所謂岸和田殿是なり。正遠の子は和田新三郎高家、高家の子は和田三郎次郎正氏。成康の長男正俊の系統は正俊の子正康一名正女、正康に三子あり。長は楠正成次は女子、次は和田七郎正季一名正氏正季に四子あり。長は小太郎行忠次は小次郎高家次は和田新發意賢秀一名源秀次は和田四郎正朝、楠正成の系統は正成に三子あり長は帶刀左衛門正行次は二郎正時次は二郎左衛門正儀、正儀に四子あり長は小太郎正勝次は二郎正元次は二郎左衛門正高、正高の子は和泉左衛門入道朝成、朝成の子は和泉左衛門正高、正高の子は和泉八正直、正直の子は和泉掃部助成晴、成晴の子は和泉掃部正光其系圖左の如し



高遠 和泉四郎

正遠 和泉泉守岸和田城主
正六位下

行忠 和泉四郎

行隆 和泉四郎

延元元年五月二十五日楠止成率兵七百與足利兵八十萬戰于兵庫湊川兵潰而後入廣嚴寺客殿無爲庵正成自刃正隆率正成首級之敵將高氏放火無爲庵入火中自剄死

高家 和泉新三郎 岸和田城主

與正季弟一子同名正平十六年十二月南軍大舉襲擊京師高家振身所向無前足利義隆後光嚴院走近江

正武 和泉三郎次郎 岸和田城主
正六位下

正平二十四年正月楠正成詣京師與管領議和北朝爲正備來降將軍義滿正武聞之憤慨甚建德二年八月奉兵攻正成於吉野

正康 楠河内守

一名正玄本名正遠

攝津河内守贈左近衛中將

正成 正一位

女子

一名正氏和田七郎

正季

元弘元年九月楠正成築城子赤坂將以奉乘輿城縮成取
農粟糧兵僅五百人正季以兵三百出城伏山而俟賊到是時
等置行在既陷東軍悉到赤坂見其城乃憫笑曰此可隻手掀
耳爭下馬肉薄攻之正季兵自別山起正成以二百騎開門突
出三面合擊賊大驚擾亂奔兵器走每戰破賊賊講長圍持久
策城中糧盡援軍不起正成與正季燒城而去入金剛山明年
正季與正成出擊湯淺定佛於赤坂河内和泉一國以兵二
千陣于天王寺隔出通倫高橋宗康將五千騎攻天王寺正成
與正季分兵伏各處誘以敵賊皆陷伏二將僅以身免十一月
正成築城於千劍破以兵二千與正季據之使別將守赤坂護
良親王亦舉兵力吉野三年二月北條高時出大兵東軍自三
道上分爲三軍攻千劍破及吉野赤坂吉野赤坂終陷東軍悉
萃千劍破其兵八十萬正成與正季力中每無不勝賊潰殘
兵悉走軍駕自驪岐還幸正成與正季率兵七千出奉迎兵庫
前驅而入京師延元元年正月足利高氏直義入犯京師正成
正季以兵五千守宇治出奔兵伐高氏高氏與直義走築紫五
月高氏以兵八十萬東前新田義貞以兵二萬五千陣于和
崎高氏將水軍其兵五十萬直義將陸軍其兵三十萬海陸並
到正成與正季率手兵七百陣于澗川水軍先鋒而東義貞
拔軍循之舟者如追騎者如走高氏全軍已上和田崎正成願

謂正季曰我腹背受敵不可避也正季曰先破前者而後接背
者如何正成曰然於是兄弟雙雙突直義之陸軍七勝六合將
獲直義高氏分兵來援包後正成回馬當之血戰十六合
盡亡其騎所餘三十三騎乃退入廣嚴寺無爲庵坐釋體各身
被創正成願謂正季曰死而爲何卒正季曰願七生人間以
滅朝歌正成欣然曰是得吾心耦刺而死宗族十六人從十五
十餘人悉死之

行忠 小太郎

高家 小次郎

賢秀 一名源秀和田新發意

資性勇悍善肩尖刀正平二年十二從楠正行與細川顯氏山
名時氏等戰住吉及天王寺手斬數十人追敵走斬山名兼義
三年正月高師直以兵六萬侵河内正行率兵三千防四條
離合三十有六回馬悉負數矢棄弁馬徒步而進追師直陣
行正時正朝皆被數創兵亦潰各自交刺斃而止取獨賢秀耳
混敵狙師直有正行部下云湯淺太郎左衛門者已降居師直
陣賢秀自後斫其足跡之賢秀惡其不義隨眼瞰太郎左衛
門其眼光如炬即斬其首首猶不嘆賊怖并之於林中太郎左
衛門得疾俯仰觀賢秀頭絕叶七日吐血而死賢秀家人聞
之齋首還乃埋塚內案塚

正朝 和田四郎岸和田城主

正平 正平二年正月三日於四條戰死

正行 楠帶刀左衛門正五位下

正時 二郎左馬介

正備 楠二郎左衛門左馬介

和田掃部助

應永三十年七月足利義持與持氏有隙成晴奇貨之欲刺義持事
露自及

和田平右衛門

正光

正長元年十月正光與楠五郎左衛門入道常泉相謀狙將軍足利
義教於京師謀洩永享元年九月二十三日一人於六條河原所刑
一族七零八落降干民間或爲僧又爲農

正勝 小太郎

元中五年三月正勝以兵五百破山名氏清率三千騎來攻
城中糧盡城陷正勝乃走吉野

正元 二郎

正秀 二郎左衛門左馬頭

新平

和田左衛門入道淨水

朝成

元中五年三月楠正勝起兵據千劍破足利義滿使山名氏清討正
勝於河内朝成援正勝與氏清戰于河内千劍破終陷正勝走吉野
朝成人道而號淨水

和田新左衛門

政明

應永四年四月足利義滿據紀伊南朝領造金閣於北山弟政高據
慨自不禁乃發兵於河内和泉一國欲討義滿於京師而事不成終
入吉野不知所其終

和田平八

正直

應永六年十月大内義弘舉兵於堺浦欲討足利義持於京師正自
援之十二月足利義滿遣兵擊義弘義弘走正直敗死

和田平右衛門正光正長元年十月楠五郎左衛門入道常泉相謀狙將軍足利義
教を刺さむとして京師に詣り謀洩れて永享元年九月二十三日六條河原に於
て刑せらるる一族七零八落して皆民間に降り或は農に爲り又僧に爲り嘉吉元
年六月義教統され二年十一月義勝將軍に爲り三年七月義政襲きて將軍に爲
り文明五年十二月義政罷めて義尚襲きて延徳二年七月義相明應三年十二月義
澄永正五年七月又義植大永元年十二月義晴天文十五年十二月義輝永祿八年七
月義榮十一年十月義昭相繼して足利氏將軍となりて暴威を天下に恣にし
楠正成の系に繋がる和田氏の子孫は否として顯れざりき天正元年七月將軍
足利義昭は織田信長の逐ふ所となり足利氏亡び正光の刑せられたる永享元
年より足利氏の亡びたる天正元年まで一百四十五年間陰々滅々の間に子孫相
續き一家の天運運遷して織田豊臣徳川の三氏十八代間和田氏代々岸和田村を
去らず通稱を善右衛門と云ひ奥助と稱し世襲の庄屋を勤務して來れり舊家
和田氏の戸名にして庄屋勤務したる者の中には先代勝朝を以て名史とす嘗て畫
像あり其讚に曰く

君諱勝躬初名源之丞號靜田中要長男安政二年入襲楠公裔孫之家奉庄屋職治
岸和田一村以幸德要道無民蕩家產植村民和睦上下無怨上忠官衙附託之重下
慮慮人倫類之切夙與夜寢不懈其職非木綿之衣服不致服非職務之法言不致道身
無擇行口無擇言行瀾一村無怨惡言瀾一村無口過是以其制不肅而成其令不嚴而
治諸人莫違其德報之以年々歲々之祭嗚呼所以至德要道也

從三位 岡部長職

美濃守從五位下岡部長職の長男安政元年十一月十六日生、同三年六月伯父
筑前守岡部長職の養嗣子と爲る。明治元年十二月二十八日五萬三千石の封を
襲き岸和田の城主と爲る。同二年正月從五位下に叙せられ美濃守に任ぜらる
二月二十六日七表して假給を奉還す。六月十二日岸和田藩知事に任ぜらる。
同四年三月二十日東京府の貴族を命ぜらる。七月十四日藩知事を免ぜらる。
同八年十一月二十五日東京府を發して米國に留學す。同十五年英國に留學す。
同十六年十月三十一日歸朝。同十七年七月八日子爵を授けらる。同十九年三
月二十五日公使館の參事官に任ぜらる。十二月十七日英國公使館の在勤を命
ぜらる。同二十年一月二十八日正五位に叙せらる。同二十二年十二月二十七
日外務次官に任ぜられ勅任に叙せらる。同二十三年一月十六日從四位に叙せ
らる。二月二十二日歸朝。七月十日貴族院議員に選舉せらる。同二十四年六
月十五日特命全權公使に任ぜらる勅任官二等に叙せらる。同二十七年六月二
十八日願に依り本官を免ぜらる。同二十八年三月十六日鐵道會議員を命ぜら
る。六月二十九日正四位に叙せらる。同三十年十月十二日東京府知事に任ぜ
らる。同三十一年七月十六日願に依り本官を免ぜらる。同三十二年一月二十
五日鐵道國有調査會の副會長を命ぜらる。同三十四年六月二十一日從三位に
叙せらる。同三十九年四月一日明治三十七八年役の功に依り勳四等に叙せら
れ旭日小綬章を授けらる。同四十年五月二十五日臨時假遣調査委員會の
委員を命ぜらる。七月十四日司法大臣に任ぜらる。二十八日鐵道會議員を罷

む九月十二日法律取調委員會の會長を兼ね、同四十二年十二月二十五日勳三
等に叙せられ瑞寶章を授けらる。同四十三年十二月二十六日勳三等に叙せら
れ瑞寶章を授けらる。同四十四年七月十日貴族院議員に選舉せらる八月三十
日司法大臣を辭す九月十三日法律取調委員會の會長を罷む。大正三年六月十
八日議員の功に依り金杯一個を賜はる。同五年一月二十二日學費院評議員會
の會員を命ぜらる四月一日大正三四年役の功に依り旭日重光章を賜はる八日
樞密顧問官に任ぜらる十二月貴族院議員を辭す

故相馬肇

讚岐國高松の藩士片山忠一郎の四男享和元年十二月十八日生る字は元基後逸
老父九方と號す藤澤東嶽と相携へて國を出で中山城山に從ひて祖來學を修め
天保元年京師の青年を養成す嘉永四年九月岸和田藩に聘され大字岸和田藩町
六百九十四番屋敷に住む既にして御使番格の客分として二十人扶持を當行は
る藩士に教授して衆望囂せり堀忍村直親を襲みす明治十二年三月二十八日
卒す享年七十九著す所左氏春秋解史記定本立誠堂詩文等がある。

故寺田德

豐野新右衛門の長女天保三年五月二十日生る嘉永五年歲二十一才にして寺田
氏に嫁し梅野業を襲みて専ら、明治元年夫を喪ふやますく心を家事に碎
き一方には身を子女等の養育に勞し常に守分勤儉の道を説き實踐射行の美風
を教へたり其功果として長男其與次男元吉三男徳太郎四男利吉五男久吉六
男廣吉七男定藏いづれも會社銀行等の重役として地方經濟界の模範たり四十
年十一月與風會は物品を贈與して其美德を表彰せり四十四年二月一日歿す享
年八十歳遺言に賢母の德である。

正五位 土屋弘

土屋半吾の長男天保十三年十二月十三日生る十二歳にして講習館に入り業を
相馬盛に受けて祖來學を修む萬延元年但馬に到り池田草庵に從ひて朱子學を
修め後國に販りて廣く兵書を究む文久三年西遊を志し中國を漫遊せり時
に勤王攘夷の志士起りて都鄙騷然藩主に召還されて軍事奉行に任ぜらる明治
元年三月奉行を辭し藩學校の教授となりて待讀を兼ね其後師範學校の校長と
爲り又私塾を興して書生を養成す十九年吉野師範學校の校長に轉じ兵庫縣奈
良縣等の師範學校長を歴任して二十六年華族女學校の教授となる三十九年正
五位勳五等に叙せらる著す所皇朝言行錄九卷、馬關日記一卷、孝經纂釋一卷
あり文部省賞其功績を賞し六國史を賜ひ大日本教育會も亦銀章を贈與した

岸田鹿藏

角野善助の次男嘉永元年二月十五日生る明治五年岸田氏の養子となり入籍す
性質朴直にして勤儉を守り農業の勉勵常に衆目を驚かしむ先代の傾けたる家
産を挽回し小作田地一町八反五畝歩畑地二反歩を耕作し猶耕作作用を兼ね
たる搾乳牛三頭を飼ひ夙に起き晚く寝て假りにも午睡の夢を食らふ宜なる
かな徳は孤ならず心隣あり近隣勤勉の美風に感化せられ比々見做はざる農家
なきに至る茲に與風會は紀念品を贈與して況く農家の德鑑たるを表彰した

舟木一二三 (市長)

岸和田の人岡部氏より出づ明治三年岸城町に生る。師範學校卒業後大阪市西
區西小學校同北區瀧川小學校に教鞭を執り普通文官試驗合格後大藏省稅務屬
となり。大阪稅務管理局中之島、和歌山、奈良、富田、林の各稅務署に歴任
し明治三十九年内務屬となり警保局に勤務す、後福井縣三方郡長同吉田郡長





兒王政介

岸和田市長職務暫行して創始の岸和田市政を執行し舟木三三氏市長就任によつて其の任を解る。明治二十四年七月六日東京芝高輪南町に生る。學を東大法科に修め高等文官試験に合格して大正五年歳手縣廳となり同七年三重縣廳に累進大正九年新潟縣廳を経て大正十一年六月大阪府理事官に任ぜらる。十一年十一月岸和田市長職務官掌となりて治績頗る見る可きものあり。市民君の功績を讃せざる者はない。年未だ而立に過ぎず。君の前途は春海洋々たるの觀がある。

濱科に學び、業を終つて明治四十一年八月堺市書記に任ぜられ大正三年一月堺市會書記長となり、五年三月庶務課長に累進し九年職を辭して岸和田町助役に推薦され、十一年十一月一日市制實施せらるるや岸和田市助役代理を命ぜらる。市制問題起るや終始一貫努力して財政五年計劃を立案して市制の實施を速かならしむる等岸和田市の建設に



山田宗三郎

(市會議員)

君が明晰なる頭腦と熱烈なる努力は世人の敬重措かざる所である。尙ほ春秋に富むその前途や多望なりと謂はねばならない。

北海道の人明治二十年四月十九日生る。大正三年東大政治科の出身にして俊才の譽あり。山田家に嗣子となつて和泉銀行に入り専務取締に選ばれた。曩に町會議員として合名高く、前町會にあり



辻利一郎

(市會議員)

岸和田の人辻利吉氏の長男、明治二十年一月十九日生る。家代々豪農にして郷黨に信望あり。君

て市制問題に對し絶へず市民の利益と幸福の爲めに努力する所あり市民亦君が愛町の精神の深きに感謝せざるものなり、町會解散後衆人の推選によりて市會議員となり亦議長に推選せらる。君資性活達にして人情に厚く、利慾に淡泊にして名譽心なく人格高潔の士である。故に、君を仰ぐ事倍も師父の如く其徳を慕へる者が多い。君は尙少壯前途洋々として春海の如く、岸和田市の將來は君に期待する者が多い。希くば市の爲めに自重せられよ。

菅田元成

智識一世に秀で快刀亂麻を斷つ手腕ある人は夫れ君か。君は明治十七年三月一日千葉縣長生郡西村に生る。中學師範を経て早稲田大學政治經

は中學を卒業するや關西大學法科に入學し、業を卒へて大正二年一月迄南海鐵道株式會社に奉職し其後五十一銀行に入りて行務に努力する所あり、後獨立して大阪市の豊崎町に歸工業を經營したが今や郷里に歸つて大いに社會事業に努力せらる。昨年官本會組織せらるるや推されて副會長となり今回亦市民多數の推選によりて二級議員の最高點を以て當選し市會副議長に推された。君や年齢少壯、才幹人に優れ、能く人をして悦服せしむ。未だ大事業を起せし事なしと雖もその將來や眞に多望である。

奥佐太郎

(市參事會員)

岸和田の人、明治九年四月五日生る。代々素封家たり、嚴父在世の頃は印刷業を營み頗る盛大で



あつた。實に岸和田に於ける印刷業者の元祖である。前町會議員として合名高く學務委員を務め市制實施運動の際には實行委員として功勞あり、今回市會議員に當選し市參事會員に選任せられた。君性頗る活達にして奇智に富み且つ名利に恬淡にして清廉の聞へ高く人懐きとして推重せられに居る



中村宇一郎

(市會議員、市參事會員)

岸和田の人、明治十二年三月六日生る。印刷業を營む、幼時早くも頭角を現はす明治四十五年四ヶ町村合併の當時思成會の中心人物として反對派と争ひ目的を達成した。一度町會に列して梅町の爲めに盡す所あり、往年商工會なる實業團體

金納猪之吉

(市會議員、市參事會員)

岸和田の人、明治六年二月十六日生る。明治四十三年三月岸和田藩町會議員に當選し明治四十五年三月一日岸和田四ヶ町村合併後第一期岸和田町會議員二級議員に、大正九年三月一日第三期二級議員に當選す。大正十一年一月十五日町制實施十週年記念に際し表彰せられ、三重縣盃一組を受く。現に、岸和田漁業組合理事長及び、岸和田信用組合理



事の任にある。君性清廉潔白にして而も世才に長じて居る。大正十二年一月十三日市議員に當選し市参事委員となつた。市會にありても剛直を以て情弊に重きを置かれて居る。



岸田喜代門

(市會議員、學務委員)

岸田の人、文久三年十一月三日を以て上町の素封家に生れた。明治三十六年村會議員に當選して以來十餘年其職に在り、四ヶ町村合併後町會議員として十餘年間引續き其職に在り、又農會長、學務委員、郡會議員、郡参事委員等の公職に在り其の他政友會地方委員大阪支部幹事として地方政黨の發達に盡力する處不短くない。夙に起毛用チセルの栽培に志、多年の苦心經營して其の目的を達した。君資性温厚にして篤實常に温顔を以て人に接し未だ嘗て喜怒を顔に現はした事がない。

聲望市民間に高き當然いふべきである。

浮舟音次郎

(市會議員、市参事委員)

孔子嘗て容貌を以て人を表せし是を子羽に失す云ふ今君等は君が其容貌婦人の如く優和なるに一度議論に起つて見れば婦子の如く氣力超過、言論風發、其平常に蓄ふる所一時に迸發するの概がある。明治十八年一月七日岸和田に生る。町制時代に町會議員、學務委員の公職に在り又南町愛親副會長として令名あり今回市會議員に當選し市参事委員に推選せられ常に市民の爲めに努力奮闘して居る。



松浪定吉

(市會議員、市参事委員)

智者は智に苦しみ、策士は策に仕る。温厚なる君子は其胸を横む故に敢て人に憎まれず。君の如きは眞に其の人である。明治八年四月四日泉州北中通村大字港に生る。代々顯慶鏡用ガラス製造業として名聲高く本邦に於て第一位稱せられて居る。

居る。前年町會議員として二期間其職にありて岸和田町の爲めに盡力し郡會議員となりて亦令名あり、市制問題起るや實行委員となつて盡力し、市制實施せらるゝや市會議員に推選せられ市参事委員に列し市政に貢獻しつゝある。亦本町會の副會長となり同町の爲めに努力し市民の敬重信頼を博して居る。

川崎正一

(市會議員、學務委員)

明治十六年二月七日を以て生る。父君長左衛門氏は沼野村長、大阪府會議員等の公職に在つて多年地方自治の發達に盡す處多大なるものがあつた。君幼にして俊敏家に優れ小學校時代に神童の稱があつた。長じて茂を負ふて東都に上り帝國大學農科に學び卒業後農學校に教師を執つて育英に従事し、又農業技術師として農事の改良發達に貢獻する



處不短くなかつた。先年職を辭して郷里に歸りて閑居悠々自適してゐたか市民は閑居を許さず今回市

制實施せられ市會議員の選舉執行せらるゝや衆望を負うて當選の榮を荷ひ學務委員に選まれ市政に盡瘁しつゝある。

松谷熊次郎

(市會議員、學務委員)

泉北郡穴師村字宮の人、明治元年三月三日に生る。岸和田に轉住してより三十二年、明治三十七八年日露戰役に従つて功あり勳八等に叙せらる。濱町兵士員として在郷軍人の爲に盡し其の功に依り木盃を下賜せらる。十五年以前町會議員たりし



事もある現に實業同業組合評議員となり金光教信徒總代である。今般市會議員に當選し學務委員に推された。君資性温厚にして而も奇才智あり市會に於ても數次警句を吐いて他を警むる事が多く市會一方の人物として重きを爲して居る。



島田良藏

(市會議員)

世に業士云ふものあり、君の如きは業士にして眞の國士の風あり、君は明治三年六月二日生る幼より苦學勉勵學識其の岸和田紡績社に入らるや社長寺田其與茂氏の知所となつて工場長に累進し、更に大電取締役に榮轉し寺田氏の代理として手腕を發揮したるが、泉州織物會社設立せらるや入つて事務取締役となつて經營の衝に當り同社をして今日ありしめた。前後三回町會議員たり、市制實施問題起るや其の實行委員として令名噴々たり、資性情誼に厚く君を感ずるもの多く今や市會の重鎮として市民の重望を負つて居る。



田代循

(市會議員)

岸和田の人、明治六年七月二十一日生る。代々岸和田藩の家老職たり、金澤第四高等學校卒業後東京帝大法科に入学し明治三十四年卒業後日本生命保險會社調査課長に就職し傍ら關西大學の講師を兼ね經濟科に教授を執り其の後日本生命名古屋支店長に榮進し大正九年辭任して五十一銀行に入り現に常務取締役たり前町會議員の任にある關係上、市制實施副會長に選ばれ、市制實施に大いに盡す所あり今回又市會議員に當選し令名噴々たり、君資性頗る廉直にして不正を惡む事仇敵の如く毫も假さず頭腦にして經世の才に長じ、剛毅廉直にして常に侃々諤々の正論を吐き市會の重鎮である

落合準之助

(市會議員)

和歌山縣の士族にして明治四年十二月二十四日生る。幼より學を好み夙に醫術を志し、廣瀬の後を受け貧乏士族の醫への通り殆き苦學同様の修業をなして遂に其目的を達成した。明治十四年頃本市に移住し目下泉南郡醫師會の會計幹事として現在に及び今回市會議員に選舉せられた君資性温厚にして仁慈の心厚く醫師として誠に好適任者である。市會に在りては温健着實公平無私の態度を執り俯叢の敬重を受けつゝある。



岸村 齋

(市會議員)

岸和田の人、明治二十一年五月二十八日を以て本市の素封家に生れた。明治四十一年大阪府立農學校を卒業し其の後和泉水力電氣株式會社に入り現今は宮本町會々長として町の發達を計り青年指導の任に當つて居る。今回市會議員の選舉に當り一級より出馬して當選した君は市會の最年少者にして前途頗る有望。市民は君に期待する所多大なるものがある。

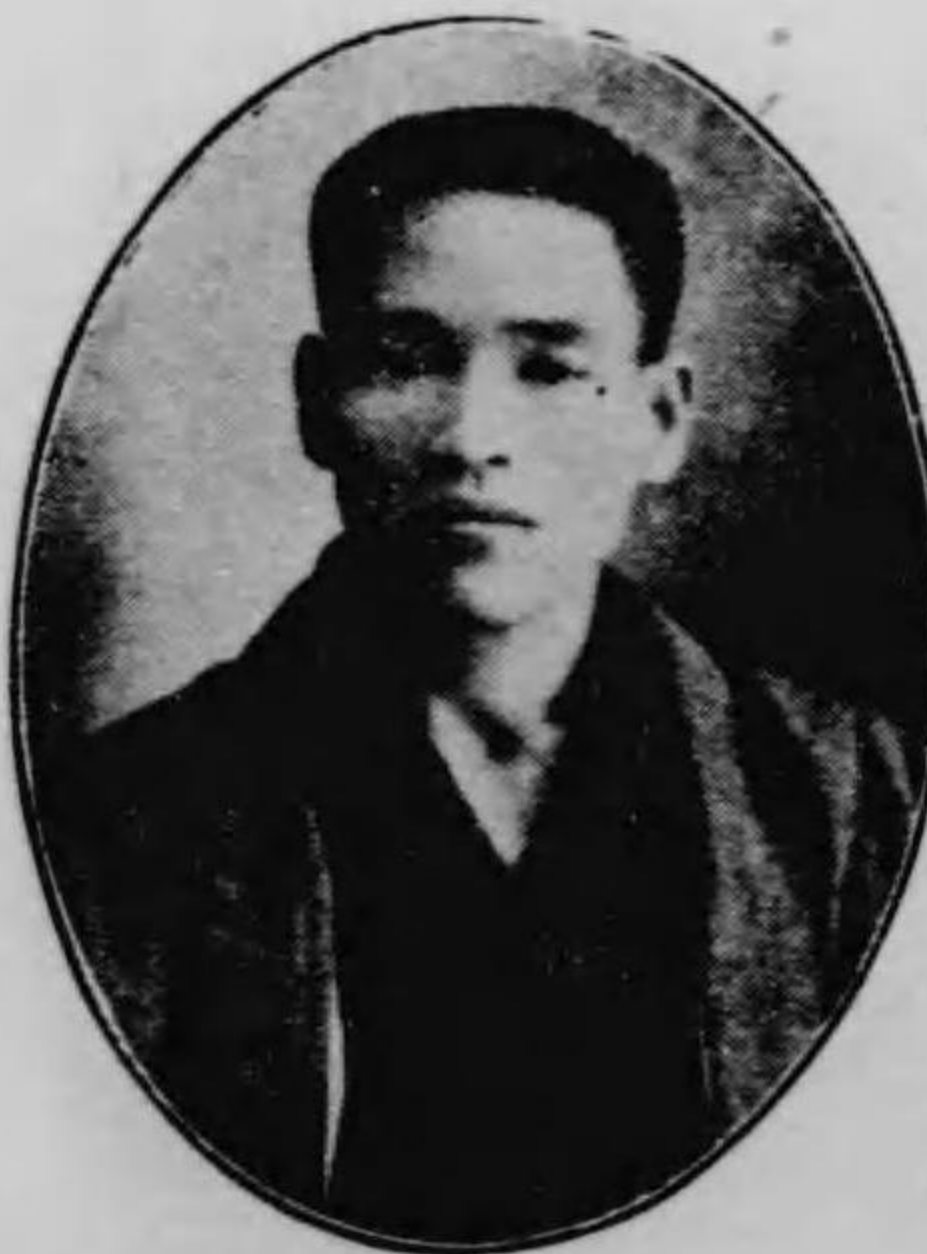


塩谷 伊助

(市會議員)

岸和田の人、明治十二年三月十日生る。陸軍歩導の任に當つて居る。今回市會議員の選舉に當り一級より出馬して當選した君は市會の最年少者にして前途頗る有望。市民は君に期待する所多大なるものがある。

岸和田の人、明治十二年三月十日生る。陸軍歩



東 磯太郎

(市會議員)

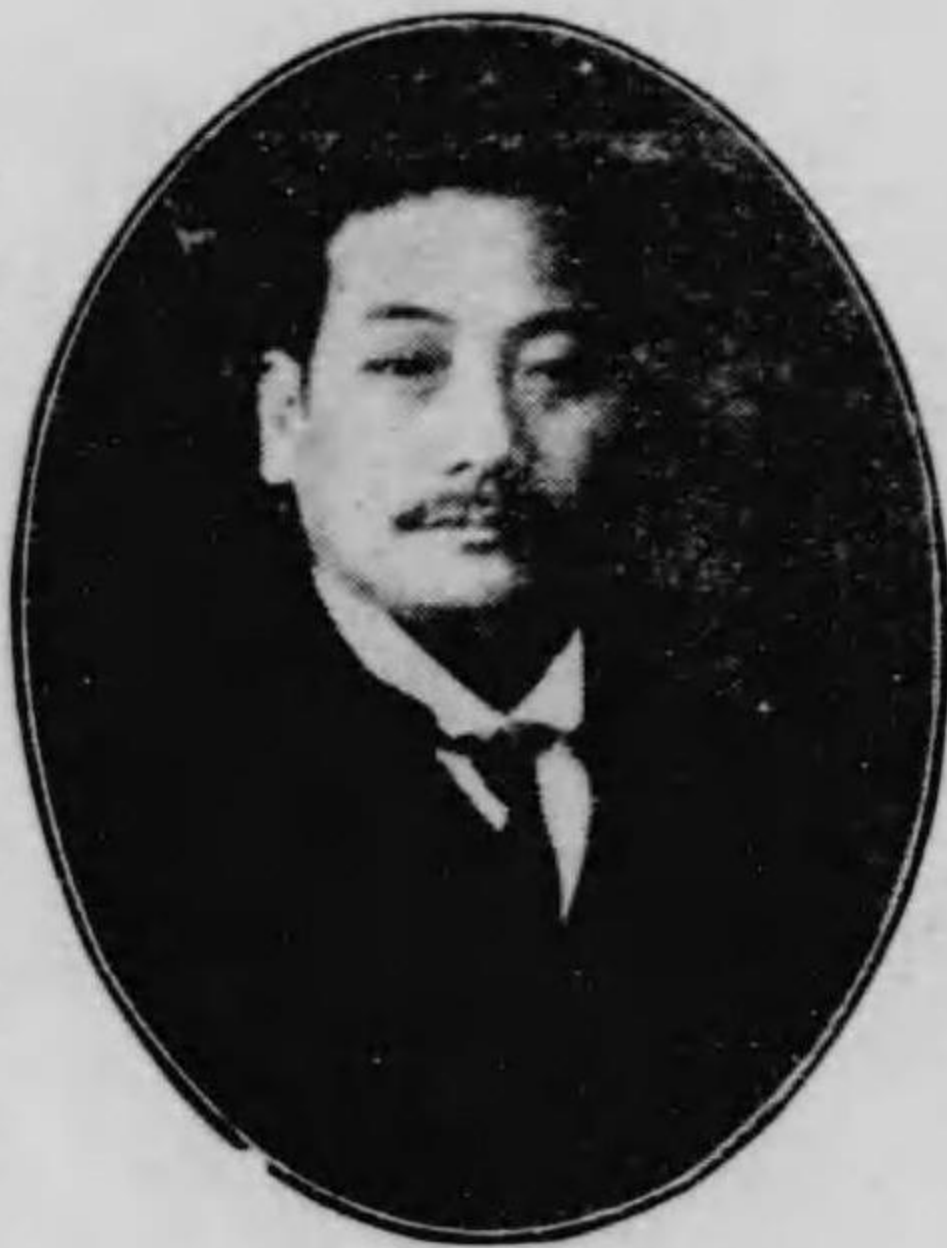
岸和田の人、明治十年一月十八日生る。先代より續き瓦製造業に従事し現に商工會幹事、岸和田信用組合評議員、筋海町協議員として地方のために盡す所少からず。今回前町有志の推薦に依り市會議員に當選して中正會を組織し大いに市政に努力せらる。君資性剛毅活潑にして而も人情に

厚く人を懐み能く社會の爲めに盡す所あり實に當世稀に見る人格者である。

堺 安之助

(市會議員)

岸和田の人、明治九年八月八日生る。舊岸和田町の收入役を振り出しに明治四十年泉州瓦斯會社の創立委員長となり次で専務取締役就職十箇年勤続し現に岸和田信用組合及び商工會の幹事並松町公友會々長の任にある。多年町會議員の任にあ



榮木 十一

(市會議員)

堺市の出身にして本市に移住以來町會及び郡會議員となり地方自治政治に貢献する所少からず機料並に油商を營み家業年々共に榮つゝある。性質温厚篤實なるを以て敵を作る事少く今や市民の重望を負ふて市會議員に當選し君が得意の手腕を奮ひ市民の信頼を博して居る。君たる者自重して其期待を完すべく努力せねばなるまい。今年四十九の働き盛りである。

つたが市制實施の急を叫びて市會に建議し市制實施の機運を作つた。市制調査委員として盡力する處多く今回市會議員に當選し鋭意市政の發達に盡して居る。君資性頗る調達にして事に當つて熱心市會一がの人材である。

土生 半藏

(市會議員)



川崎 清定

(市會議員)

功あり市會に在つては同志中正會を組織して公平無私たる態度を執り隱然たる勢力を有して居る酒造業組合幹事、岸和田商工會及び五軒屋町會協議員の任にあつて本市の商工業發達に努力する處少くない。



北濱 斗一郎

今市制實施せらるゝや家室により市會議員に當選した。君資性温厚篤實にして同情心に厚く世人の尊敬を受けて居る。君の父翁清平氏は沼野村長岸和田町會議員として多年本市のために貢献する處があつた。今や君市政界にあつて本市のために盡して居る。此の父にして此の子あり謂ふべしである。

(市會議員)

其闘争の如く、氣骨を奮い、大志を立つ。彼の志望、彼の意氣は近世稀に見る立憲傳中の一人なり。岸和田の人、明治二十年七月二十七日生る。彼れ幼時家貧しくして自ら産を起さん。志しあり、獨立獨歩何物の扶けを待たず。精勵業を勉め、茲に今日の地位を造つた。今や石炭販賣商を營み、同業組合の幹事である。第一次市會議員二級候補として當選し、市會に於て令名噴々たり。今亦大北町にて消防隊を組織、自ら會長となり大いに社會に貢獻する所あらんとして居る。



十場吉太郎

(市會議員)

人若し善人は如何なるものか。問はば直に答へて、勤直の士なり。眞に然り、十場君の如きは其の人乎。彼が頼み、其の誠意を吐露する時誰か其人格に敬服せざる者があらう。明治六年三月三日岸和田市。



岸上市太郎

(市會議員)

岸和田の人、明治十一年一月十六日生る。岸和田市に於ける米穀商の泰斗たり。米穀同業組合の副組長の外、岸和田新炭同業組合組長として令名あり。今同市會議員に當選し、岸和田市の爲めに努力して居る。市會を見渡した處、君は何も云ふても鐵中の錚々たるものだ。一人一黨主義を以て眞に岸和田の爲めに努力せるは君である。市民の君に期待する處大なるものもある。決して偶然でない。

西ノ内房吉

(市會議員)

岸和田の人、明治十二年一月三日生る。性謹直にして社會事業に熱心なり。幼より苦心奮闘して業務を勵み、輸出に業に従事して百折撓まず能く、赤手空拳を奮ひて今日の家産を積んだ。今や南洋南米印度方面に廉を輸出して名聲隆々たるものあり。紙屋町青年會長として青年教養の任に當り、又履物商組合の組長として令名がある。今同市會議員に當選して市政壇上の正義の獅子吼をなし、市會の一人物として世人の視聽を集めて居る。



笹島庄一郎

(市會議員)

岸和田の人、笹島理三郎の長男なり。君の家は代々角庄に號し、本市屈指の名門の舊家である。父君理三郎氏義氣に富み、能く衆人を救助せしかば、郷黨君を仰ぐもの頗る多い。筋海町會副會長として令名あり。度量衡器販賣業を營み、家業年に榮へて、旭日昇天の概がある。君資性温厚にして人情に厚く、亦奇智縱横にして敏捷。今同町民の推選により市會議員となり、市民派に入り更に中正會を組織してその牛耳



岡田惣吉

(學務委員)

君幼時より艱難辛苦を積み、克己勵勵遂に今日の産を積んだ。さればよく下情に通じ、貧民を救助するを以て一の道樂となし、その慈悲心の深きに泣かぬ者はない。明治二十七年日露戰役に従軍して、盡忠報國の誠を致し、鎮西町會議員として町政に盡す處多なるものがあつた。常に地方青年の教養指導に腐心して居る。町民の君を徳とする偶然でない。今同市制實施せられ、市會議員の選舉執行せらるゝや、町民は一致して君を推したが、君は堅く辭して動かす後進者のために道を開いた。市會成立するや、君は市民中より學務委員に推薦せられ、本市の教育行政に參與する事となつた。更に其の人を得たものさいはねばならない。

坂口治平

(市會議員)

岸和田の人、明治元年三月八日生る。海運業を營み、一ろ運漕店並に丸岸運送馬の名聲は廣く世に知られて居る。多し年町會議員として其職責を盡し、市制實行委員として令名あり。資性活達にして同情心強く、常に社會事業に盡力して貢獻する所が多い。市制實施と共に町民の推す處となり、市會議員に當選した。港灣問題に就て大いに努力する所あらんとして居る。



宮内觀八

(學務委員)

岸和田北町の人、宮内棟吾氏の次男にして、明治十四年八月二十四日生る。嘗て大阪百三十銀行に奉職する事八ヶ年、後職を辭し、岸和田に歸り、精米業を營む事十ヶ年、宮内精米所の盛名を斯界に轟かすに至つた。令兄可一氏は學校資金に一萬圓を寄贈した篤志家にして、君亦其氣風を受けて社會事業に熱心である。宮内町會の幹事に推選せられ、今亦市民中より學務委員に推舉せられた。君は資性剛毅活達にして清廉の聞へあり、能く郷黨の爲めに努力せらるゝ。實に當世稀に見る君子と云ふべきである。



小林惣一郎

(學務委員)

岸和田の人、明治二十二年五月十七日生る。高



川口松太郎

(市會議員)

泉州貝塚町の人、明治三年三月二十五日生る。前町會に二期間議員を勤め、本町親交會々長、商工會幹事として



等小學卒業後大阪市東區伏見町五丁目倉田商店に奉公する事数年、主家を辭して岸和田に歸り父君の跡を襲いで今日の基礎を築き上げた實に奮闘努力の人である、今や原田式織機泉州一手販賣代理店、新田帯皮の泉州一圓の代理店として實業界に重をなすつゝある、中町會副會長の職にあり今回推選されて學務員となつた、少壯有爲の君の前途は春海の洋々たる觀がある。

田中良一

(學務委員)

泉南郡南近義村大字澤の人、明治二十二年一月六日生、岸和田中學校を卒業して廣島高等師範學校に入り業を卒へて後大阪師範學校附屬小學校に教職を執り後一年志願兵となり少尉に任官せられ退營後南近義村小學校長に任ぜられ後泉南高等女學校教諭を奉職し亦轉任して岸和田町高等小學校長たる事三年更に濱校長に轉じた、君資性温順



恭敬にして博愛常に救世の道に努力し汝々として擁ます世人君を目して少キリストト呼ぶ故にしせんやである、今回市會の推選により學務員となつた、適材適所は君のために設けられた言たるの感なきを得ぬ。



佐野馬太郎

(市參事會員)

岸和田の人、明治三年十一月十七日生、明治二十三年現役兵八聯隊に入營同二十七八年戰役に出征一等軍曹勳八等白色桐葉章金百圓を賜り同三十八年日露出征勳七等青色桐葉章金二百五十圓を賜り同四十二年村會議員に當選四十五年四ヶ村合併の義起るや大いに盡力する所あり、十二月合併認可大正六年町會議員に當選同三年議事會の指示に依り泉南郡鹽小賣人組合設立同組長に當選し同四

年町會再選同七年支局織田又太郎氏より感謝狀を賜はる同五年郡會議員二期間務の今回市制實施と共に感謝狀を賜はる八年町會候補當選し元年より商工會副會長となり更に八年營業調査委員補缺十年十一月同委員今町會議員に當選し參事會員となり現に和泉實業新聞社重役事務取締役に

内田彌七

市會議員 (學務委員)

岸和田の人、内田彌七の次男にして明治十六年一月三日生、明治三十七年現役兵として入營して軍曹に昇進し日露戰役に功あり勳七等に叙せらる、歸郷後生油商を営み在郷軍人會の幹事となり會計を爲し大いに斯會に功勞あり。



商工會幹事市制研究會副會長として名ある大正十二年一月市會選に當選して學務委員に選ばる性格活達にして頗る理財に富み能く市政上に努力する所多し市會の明星として一方の重鎮たり

松原寅次郎

市會議員 (學務委員)

泉北郡山瀧村内畑の人、井出清太郎の三男にして入りて松原家を繼ぎたり明治二十年生、幼にして慧敏夙に秀才の譽あり、天王寺師範を卒業して南陽商會を組織し石炭問屋を營む、今回市會議員に當選して學務委員となり、頗る市政に貢獻する所多し、性謹敏にして剛直荷くもせず實に公人として世人の敬服する所たり。



寺田甚與茂

嘉永六年十月二十四日泉南郡南守村字西ノ内に生る氏が生れた當時の寺田家は赤貧洗ふが如きであつたが賢母徳子の訓育により長ずるに及んで勤儉力行遂に今日三千萬の富を致し益關西財界の重鎮となつた、然れども自ら奉ずる事頗る薄く腕車自動車をもち身を以家人に儉素の實例を示せ

り、古稀の老齡を以て今尚は職工に伍して紡績事業に従事して倦まず、一代の偉人稱すに決して論美にあらずと信する。

寺田元吉

岸和田の人、安政二年三月二十四日生、寺田甚與茂氏の令弟にして頗る理財の道に明かである、明治四十一年一月資本金百萬圓の泉州織物株式會社を起し亦明治四十五年四月一日創立にかゝる關西製織株式會社の事務取締役たりしが今や同社の相談役となり一方泉州織物の社長である、又清西元朝の製造元として其の名を知られて居る、氏兄君甚與茂翁に私収する處多く力行して倦まず、其の家に於て一個の貧乏百姓の如く頗る儉素である、然も仁慈の心深く公共事業に熱心で、世人の敬信を受けて聲望隆々たるものがある、令息元之助氏賢明にて能く父君の意志を繼ぎ佐野勲績を起して其の社長となつて拮据經營し、又思成會の幹事長として市政界に隱然たる勢力をなして居る次男榮一君關西製網の重役たり三男四左門氏他家を嗣ぎ實業界に名をなして居る。

岸村徳平

岸和田宮本町の人、慶應二年五月二十日生、幼名駒吉三稱し先代徳平氏子なきにより氏岸村家より

入つて其の跡を繼ぐ、織物業の隆盛期に遭遇して能く、父君の遺業を興隆し勤勉財を積み後約力行して今日の産を造つた、今や岸村織物會社の名は織機業界に令名噴々たるものがある、君資性温厚にして長者の風あり能く下を憐れみ情に厚く工場に通ふ職工の如き氏を慈父の如く仰ぐ者が多い、以て其の徳望の一端何ひ知るべきである社會公共事業等に對しても能く財を損して惜しまず、富豪の龜鑑として見るべきである。

浦田甚之右衛門

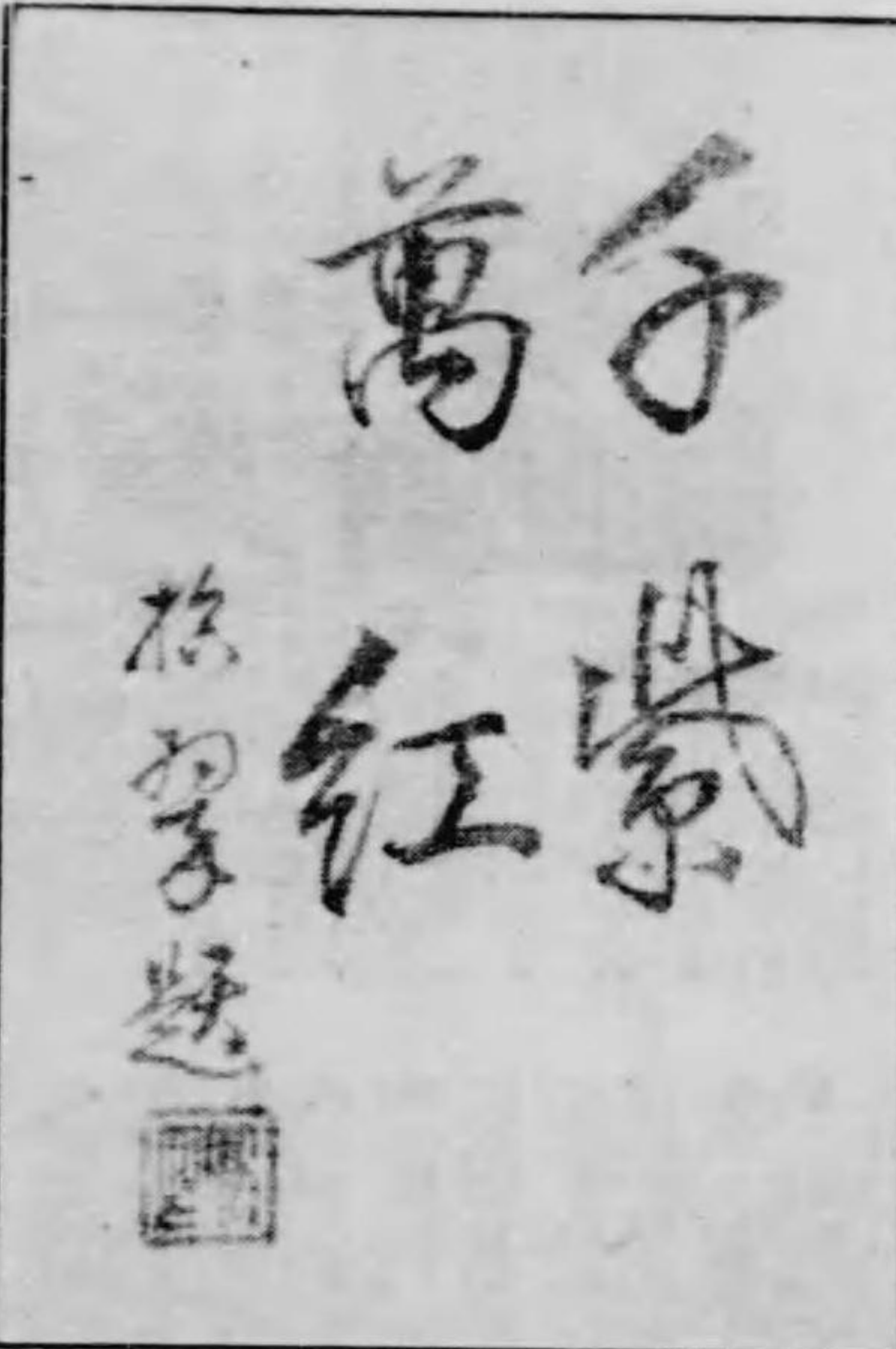
岸和田の人、元治元年二月十四日生、氏時勢の推移を遂観するの明あり將來地價の騰貴するを推し不毛の土地を購入して之を開拓す後年果して土地の價格騰貴し巨萬の富を成す、明治四十四年四町村合併問題當時岸和田村長として父君の跡を襲ひ合併尙早論を稱へ努力する處ありしも遂に時利ならず、岸和田町政成るや忽ち政界を辭して又た出ず、爾來實業界に入り和泉水力電氣株式會社を起し重役となり亦農業に力を注ぎチーセルの植栽に従事し日本に於けるチーセルの元祖たるの名を博せり岸和田市制問題起るに及び町有志の重堅を負つて其の成立に努め市制施行せらるゝや市長として一般市民より囑望せられたるも固辭して出願せず、實に氏の如きは智徳兼備の名士と謂つて好い。

宇野亮一

岸和田の人。宇野四郎の長男にして明治十二年八月四日生る。父祖代々岸和田の素封家にして常市屈指の名家である。君は富家の子弟に似ず頗る平民主義にして交際にも巧なるが故に人望が高い。和洋紡績株式会社重役、和洋貯蓄銀行頭取として聲名を博しつゝある。將來岸和田の財界を支配する第一人者に囑望せらる。近來政界に多少趣味を有するに至り市議員の一部を組織して中正會を組織



六月八日生る。帝大法科の出身にして法學士。護士たり、今や華城法曹界の花形にして令名噴々たるものあり。父は爲己氏は岸和田政界の元老として一度代議士に選ばれ中央政界に雄飛したるが氏亦政界に志しあり其の活動を待つもの頗る多し。今在郷軍人會分會長に推選せらる。君慧敏にして頭腦明晰資性活潑にして然と博愛の心厚く社會の爲めに努力す實に岸和田市將來の一人物。謂ふべきである。



松野子送

村田宣寛

せしめ體に其の牛耳を握つて居る
川井源五郎
(岸和田在郷軍人會分會長)
岸和田の舊藩士爲己氏の大男にして明治二十一年

大阪の人。文久二年五月十五日生る。警視して韓國に在任する事多年國家に貢献する所跡くなかつた。嘗て日露の戦役當時は京城に在り、皇國の志士を激勵して國事に盡さしめた。明治四十五年四



橋龜太郎

氏は明治四年正月十五日滋賀野洲郡原村に生る。獨立獨歩苦學力行して普通文官試験に合格し簿記學校に學びて業を終へ稅務官となり各地に在職して令名高く大正五年岸和田町助役に推され精勵に至らざるなく村田町長の辭任と共に推され岸和田町

ヶ町村合併し町制實施せらるや推されて岸和田町長となり難治の岸和田町政を料理する事十年。或は社會公共團體を起し或は政治機關の整備を計り十年一日の如く孜々吸々として挽ます遂に今日の如き岸和田の隆盛を致せり其の功實に云すべからざるものがある。今や閑雲野鶴老後を風流になくさめつゝあれども然も一度岸和田の重大問題に



長となり爾來三年間公職にあり、市制實施と共に退職し悠々閑に自適しつゝある

大槻與三郎

(在郷軍人會分會長)



岸和田の人。明治十八年一月二十八日生る。代々素封家を以てせらる。君岸和田中學校卒業後一年志願兵として歩兵第三十七聯隊に入隊し陸軍歩兵少尉に任ぜられ歸郷後大正五年岸和田在郷軍人分會長

に推選せられ爾來今日に至る迄分會の爲めに始終一貫誠意を以て盡すしつゝある。最近公會堂問題起るや率先して其の任に當り以て至難の事業を完成した。亦前町會に議員として令名高く其の外岸和田紡績、和泉實業新聞社、岸和田土地會社等の重役たり君性質温順にして徳望あり殊に公共の精神厚く軍人會にありても君を仰ぐ事慈父の如く聲望年々共に高まりつゝある。

井坂豊光

泉南郡八木村の人。京都大學法科卒業して辯護士試験に合格し。大阪市に於いて開業した。父君光暉氏は大阪府會議員衆議院議員にして多年國政又は地方政治に貢献する處大なるものがあつた。氏又父君の志をつぎ大正九年五月衆議院議員に當選し籍を政友會に置き岸和田市制問題起るや百方奔走其の成立に努力し遂に政府を動かして其の目的を達した。氏性頗る活達にして豪放なり政治家として前途洋々たるものがある。

寺田利吉

岸和田の人。先代利吉氏の長男なり。性活達にして霸氣あり。伯父甚與茂氏の下にあつて多年實業界の實際に學んだ。初め岸和田紡績にあるや職工となつて勤勉し後泉州織物株式會社の重役となる迄あらゆる苦辛をなむ一度泉織を辭するや株式會



社寺田銀行を創立し續いて大阪紡績株式會社を起して其の社長となり泉州の財界を雄飛して居る君の如きは眞の腕の人なり舉世酒々として父母の財産に徒食するもの多き時に斯くの如き快男子のあらは泉州財界の誇であらねばならぬ。君中少壯前途大いに爲す可き事業が多い。所謂寺田家の一門にして寺田家と別に一家風を造る處眞に奇骨凌々たる偉人物である。

廣澤耕作



岸和田の眞藩士。明治九年九月十二日生る明治十四年頃五十一銀行の重役たりしが政變により辭して東洋毛織株式會社の重役たり。明治四十五年四ヶ町村合併當時思成會の三傑として町制施行上に功勞あり政變以來一切政界を絶つて財界に身を投じ今や華城財界の一人物として威名を博して居る君性頗る豪放にして氣概雄偉堂々たる大丈夫である。資性情直に篤く能く人を憐れみ救ふ故に其人の徳を慕はざるはない。

三田長太郎

岸和田の人。明治四年三月十五日生る合資會社三田商會主なり薪炭石炭諸物價委託販賣有價証券買賣に従事す性豪放にして奇略縱横或時は巨萬の富を積む或時は赤手空拳なる處々實々の投擲ありありて豪放の膽略は一世を吞む概あり。大正六年一月本市大北町に三田商會を創立して爾來今日に至る迄家運隆々として旭日の如きものあり以て氏の手腕凡ならざるを知るに足る。



泉北郡忠岡村字忠岡の人明治元年九月十一日生る明治二十八年頃忠岡村の村長となり越つて明治三十八年頃再び同村長となる又陸軍糧食部を請負ひ朝鮮に駐在し彼地に永く居住したるものあり。岸和田の名士川井爲己氏の夫人は氏の伯母川井源五郎氏に從弟である現今は川井銀葉文具株式會社の重役たり君青年にして早く既に政治に興味を有し當地政界の名士大井下新等と友たり性頗る活潑

和田稔之助

泉北郡忠岡村字忠岡の人明治元年九月十一日生る明治二十八年頃忠岡村の村長となり越つて明治三十八年頃再び同村長となる又陸軍糧食部を請負ひ朝鮮に駐在し彼地に永く居住したるものあり。岸和田の名士川井爲己氏の夫人は氏の伯母川井源五郎氏に從弟である現今は川井銀葉文具株式會社の重役たり君青年にして早く既に政治に興味を有し當地政界の名士大井下新等と友たり性頗る活潑

巖崎芳之丞

(泉南郡及醫師會長)

にして豪放人交はるに親疎の別がない、將來の大成功して俟つべきである。



和歌山縣下田邊町の出身にして文久二年一月十五日生る和歌山醫學校を卒業して明治二十三年岸和田に來り北町に居住醫業を開業した。岸和田中學校創立せらるゝや爾來囑託醫として其の任にあり岸和田紡績會社の創立と共に又囑託醫たり。現在大阪府醫師會會長泉南郡醫師會會長及び岸和田市醫師會會長たり君性温厚篤實にして世人の氣受け好く社會から深く信託されて居る。

中原久次郎

大阪の人。鐘ヶ淵紡績株式會社にある事多年紡績業に経験を積み泉紡績會社創立せらるゝや入りて技師長となり會社の責任を一身に擔ひ。同社を

覺野勝三郎

岸和田の人明治十八年四月二十日生る木綿業を營み家業に精勵す尼ヶ崎市に土地會社を起し重役たり又尼ヶ崎新聞の社長として言論界に名を轟かせるものがある大正十二年一月市會議員候補者に立つや頗る市民の同情ありしも一籌を輸した。然れ



して今日あらしめた。資性温和にして同情心に富み社長濱口氏の信任を得又職工に對するや仁慈博愛。和泉紡績をして泉州に於ける模範工場たらしめた。氏温厚篤實にして其の風貌に接せんか春風蕩々と氣洋洋たるものがある工業界の君子人謂つて好い。

濱口龜太郎

岸和田の人。前町會議員にして市制實行委員である。五十一銀行の重役として實業界の元老たり。



岸和田の人。北町にて酒造業を營み岸和田煉瓦株式會社の事務取締たり性勤儉力行にして頗る同情心厚く下を憐れむ社會事業に努力す氏の煉瓦會社にあるや夙夜勤勉今日岸和田煉瓦株式會社の盛衰は實に其の努力多きによるやいふまでもない

左納千太郎

正義を愛し邪曲を憎む事蛇蝎の如き正廉潔自なる人は氏である。泉州に於ける洋反物商として名聲

町會在職中市制問題に力を盡し今日の進運は實に氏が努力に負ふる處が多い資性活潑にして奇智に富み能く公共事業に努力す嘗て前町會時代に人に語りて曰く岸和田町を市にするは吾庭前に樹木を植る如し若樹木を植附けんか吾人が知らぬ間に次第に生長せん是れ則ち氏の奇智の一端を表白せるものである。

金納源十郎



高く岸和田町會議員なるやよく町政に盡し公共事業に盡力する處多かつた。市制問題についても功績からぬものがある。今や野にあつて一意専心商業に努力し以て他日社會に雄飛せん三期しつゝある。現に堺町會長として合名噴々たり年四十八



川崎才次郎

君は性謹直にして學識深く夙に大志あり社會を救濟する念深く筋海町に尚義會なるものを組織して其の會長に推選せられ荷くも社會公共事業に就て町内に事あれば悉く君の力を頼はさぬものはない。亦一方菅原神社の協議員となりて敬神思想を社會に普及する事に努めて居る。家業は世々傘商を營み職業の餘暇青年會場の設立にも盡力し青年の指導に努めつゝある。されば町民の君を信賴するや殆ど慈母の如く今同市會議員の選舉執行せらるゝや町民は君を推したるも君は友人笹島氏に讓

り以て其の當選を期せしめた君の如きは眞に家人の模範とするに足る。年五十

小玉八平

岸和田の人、慶應元年十二月十六日生る。家代々海運業を営み、新業界の重鎮である。往年町會議員に推され、明政に努力し、其の他公共事業に貢献する處、少くなく、資性活達にして、義氣に富み市民間に信望を博して居る。

二山 泰

岸和田の人。代々挽物業を営み、廣く海外各地に貿易し、新業界に其の名を知る。北町會の幹事の任にある。多年町内の事に盡力、到らざるなく、公共事業に熱心である。資性温厚篤實、世人の信頼を受けて居る。家運の隆盛する決し、偶然ではない。

中川 英彦

和歌山市港北田邊町士族平七郎の長男にして、明治九年一月十四日生る。明治二十五年、和州に移住し、時計商並に雜貨商を営み、大正十一年、中川別荘工場を創立したが、經營其の宜しきを得ず、業務は日に榮へ、織機業界に其の名を奏するに至つた。現に關西製鋼會社の取締役として本市實業界に重きをなして居る。最終町會議員となり、市制實施の起るや、君は敢然立つて尙早論を唱へて、硬骨を以て唱へた



日清戦後の結果臺灣島我が領土に歸したるも、島民王化に服せざるものあるを以て、征討軍を派遣せらる。や、君從軍して功あり、日露戦の際には鴨綠江軍に従ひて各地に轉戦し、凱旋後八等に叙せられた。君資性剛直にして、機略に富み、言論に長じ、政治家的タイプを有する。其に商略亦凡ならず、家運の隆盛を來たした。社會公共事業にも、頗る熱心で、之が爲めに財を投ずる事を惜まぬ名聲の高き以て知るべきである。

山崎 秀四郎

堺市櫻の町東一丁伊藤市郎の次男にして、明治三年四月六日生る。弱冠にして才氣縱横、學問に勤め、俊才の聲があつた。山崎家に入りて嗣子となり、東都に遊學して東



京帝大農科大學乙科に學び、卒業後宮内省御園に奉職することあり。其後職を辭して岸和田に歸り、四箇町村合併以後、會議員となり、大いに岸和田町政に貢献する所あり。郡會議員となつて、亦令名あり、現に青年會顧問自治研究會幹事である。君資性温厚にして、學識深く、社會の事情に精通し、郷黨に推重せられつゝある。

岡部 繁三郎



岸和田北町の人、明治五年四月生る。二十二年四月中學を卒業、二十五年十二月近衛歩兵第二聯隊に入隊し、二十八年奈良縣巡査を拜命し、三十八年一月騎兵第四聯隊に召集せられ、六月騎兵伍長に任ぜられ、同年八月東曹に昇進、同十二月除隊せられ、明治二十七八年戰役の功により勳八等瑞寶章を下附せられ、三十七八年の戰功により勳七等青色桐葉章一時金百八十圓下賜、三十五年五月巡査精勵賞下附せられた。君は現在洋服商を営み、精勵家産を積徳を修め、社會事業に盡力する所多く、爲めに同業者間に信用厚く、泉州洋服同業組合組長に推選せられ、現に其の任にある。

金納 又右衛門

岸和田の人、代々魚問屋を営み、富貴を以て知らる。資性剛氣活達にして、義氣に富み、漁業家は君を尊ぶ。慈父の如きものである。故に一日事あれば、君のためには水火をも辭せず、其の恩に報ひて、志して居る。令弟猪之吉君、第一次市會議員に當選の榮を得たるも、君の徳に負ふ所、聊しきせぬ。

西端 辰之助

岸和田の人、代々北町に住し、米穀商を営み、多年斯業の改善發達に盡し、同業者の信用を得、現に米穀商組合長たり、其の他商工會の幹事として、大いに盡力して居る。市制問題起るや、君は町會議員として率先して賛成し、陽に獻策努力する所、聊しきせぬ。資性温厚にして、同情心深く、世人の信頼淺からぬものがある。

關 二郎

明治十九年十一月三日生る。仙臺高等學校を出て、東京帝國大學工科に學び、卒業後岸和田紡績株式會社に入り、全工場の技師長たり、君性活達にして、頭腦明晰にして、世才に長じ、寺田社長の信任を一身に集めて居る。人若し紡績會社を訪問して、君親しく膝を交へて、社會一斑の問題を語り、語り去る往く、さして可ならざるなく、語る所、誠心誠意、人の肺腑

石井 幸壽郎

岸和田の人、明治十二年二月二日生る。氏は岸和田財界の巨頭、寺田氏の顧問として、財界の飛將軍の稱あり、性活達にして、識見群を抜き、而も同情心に富み、人を憐れむ社會公共の事業に努力する處、聊しきせぬ。岸和田市の産業役として、必要缺く可からざる人材である。

多賀 壽

泉州の人、明治七年九月十六日生る。泉州織物株式會社の重役たり、勤勉力行を以て、寺田其與茂氏の知遇を受け、泉州の機業界に於て、縦横に手腕を奮ひつゝあり。性活達にして、世智に富み、能く胸襟を開いて、人に語る亦社會事業に熱心にして、貢獻する所、聊しきせぬ。泉州織物の今日の盛榮を致せるもの、君の力に與つて多きは、いふ迄もない。

岡田 伊平

岸和田本町の人、明治十六年五月一日生る。綿布業

小田 徳太郎

岸和田の人、宮本町に住み、油問屋並に樂種商を營む。性温厚にして、社會事業に熱心である。現に宮本町會の副會長たり、町民君が圓轉骨脫の世話振に感ぜざるなく、荷くも難事あれば、大小なき、氏を勞せざる事がない。亦商業に熱心にして、小田商店の信用は地方に高く、泉州地方で油商云々、ば眞に岸和田市宮本町の小中氏を聯想する程、能く知られて居る。

山下 淺吉

岸和田の人。下野町にて多くの田地を有し、米穀新炭商を営む。青年時代は家貧窮であつたが、一朝憤然志を立て、克苦勤勉、あらゆる困難に打勝ち、孤軍奮闘、獨立歩して今日の富を造つた。理財に長じ、商機に敏にして、亦任侠の風がある。市政界の事情にも精通し、展市民大會を開いて、政治上に貢献する所、聊くない、奇骨の士にして、推稱せられて居る。

川崎徳太郎



岸和田の人。文久二年五月十九日生る。幼より大志あり。長じて木綿商を営み貧困に戦ひ堅忍不屈の精神愈々堅く家産起して今日の富を積む大正六年七月中山崎織物株式會社を創立し當時僅かに十五萬圓の會社をして今日の如き隆盛を致さしめた手廻群を抜くものがある。町會議員にして町政に貢獻せる所も多大なるもの云ふべし

寺田兵藏



岸和田の人。直吉氏の長男にして舊岸和田藩士なり。明治十一年三月十三日生る。中學卒業後一年志願兵として入隊し日露戦役に従軍して功績あり陸軍中尉に選官し爾來岸和田在郷軍人分會長として多年斯會の爲めに貢獻する所あり岸和田貯蓄銀行に入りて事務取締役として手腕を振ひ本市銀行界の重鎮である。筋海町青年會副會長として白井中佐と共に青年指導に努力しつゝあり

岸田良太郎

和歌山の人。安政六年六月十四日生る。實て稅務官として令名あり。四十三銀行の岸和田に支店を設置するや入りて支配人となり縦横の手腕を振ひ同行の名を重からしめた。資性温厚にして理財に長じ銀行家として適服適所の評がある宜なりと謂ふべきである。

宮田眞三郎

岸和田の人。元吉氏の二男にして明治二十一年十一月十一日生る。岸和田中學を卒業後佐野紡績會社の重役となり傍ら材木商を営み實て製材並に製綿會社を経営した事もある資性謹直にして理財の才に長じ且つ俠氣あり夙に社會事業に熱心にして寺田一門中最も世人の信服を得て居る。

佐々木信次郎



舊岸和田の藩家老職の家に生る時に明治二十一年十二月六日也。弱冠にして俊才の譽あり岸和田中學を卒業後五十一銀行の常任監査役となり實業界に雄飛す父君の跡を嗣ぎ其の名を恥しめす愈よ佐々木家の名譽を高からしめた。君の如きは眞に名家の子孫たるに恥ぬ資性温厚にして同情の念強く其の部下の君に對する慈父に於けるが如き觀がある。

西村福藏

西村安藏の長男嘉永三年十一月十日日生る。明治六年十月始めて堺縣廳の使丁に雇はれ忠實勤勉なるを以て信用極めて厚く勉勵する事八ヶ年堺縣廳の廳止と同時に堺警察署の使丁に雇はれ内外の信用を得て二十一代の署長に歴任し勤続する事三十餘年賞與を得る事數十回一錢微も浪費せず剩餘あれば悉く銀行或は郵便局に預け遂に二千餘を

著へ外に宅地七十坪を購入するに至つた興風會は記念品を贈與して其の美德善行を表彰した。

佐々木政叉

佐々木泰象の長男安政三年九月二十六日生る曾て祖父久兵衛は駿河國志田郡の人姓は源氏其の子惣左衛門子なし鈴木泰象の子を養ひて嗣ぎなす政叉は其の長子たり初名は辰太郎長じて政叉と改む早くして父を喪ひ祖父に薫陶せられる。幼時より頗る聰明藩校講習館に入つて學を修め秀才の名なり長じて政治に精しく理財に通じ能幹を以て藩中に賞せらる藩主毎日召して制度法令の得失及び利害を諮詢す政叉諄々其の利害を上言し藩主の信任を得た明治の初年初等教育に従事し同十四年泉南郡書記となり學務を監す後辭して國立五十一銀行員となり又府會議員に選ばれ大阪府政に貢獻する處が多かつた。同二十年泉州地價修正請願委員に推され書を成して大藏省に出願し西走東奔の勞を執る。二三年間苦心の結果遂に目的を達して一割七分強の低減を得た。同二十三年大阪府第九選舉區より選ばれて衆議院議員となり。同二十七年紀阪鐵道會社を創立して其の委員長に推され。同三十一年鐵道事業發功した。南紀鐵道は即ち是である。同年十月十七日大元帥陛下に拜謁の光榮を得た。因に是より先月木氏を娶りて七男女を挙げたが同四十年五月十九日五十二歳で永眠したが世

人之を惜まぬ者はなかつた。

坂口岩藏

坂口太一郎の二男慶應二年九月二日生る壯年に及びて機械術に熱心し家産の傾むくを顧みず雨に浴し風に掃り百折千磨の辛酸を嘗めて多年の間考案の運らし遂に細入りタオルの機械器機を發明して特許を得た。其の製造の盛大に赴くと同時に三萬圓の資本金を以て岸和田タオル商會の創立成り印度及南洋諸島に輸出せる織物は年々莫大の額に達し本市の工業界に利する處大なるものがあつた。

松浪仁一郎

松浪仁右衛門の長男慶應三年十二月三十日生る明治八年岸和田小學に入り年を積む事八ヶ年一日に雖も通學を欠ず群輩中嶄然頭角を顯はし算術の如きは敢て人に學ぶを要せず自身刻苦して其の徳興を極めた後、京都同志社に入り常に特待生として優遇を受け同志社卒業の後東京に行き帝國大學に入る苦學多年備に辛酸を嘗めて二十五歳大學を卒業し其の後一息専ら法律及び商法民法の三科を研究し官費を以て獨英佛の三國に留學を命ぜられ歸朝後帝國大學教授に行じ法學博士の學位を授けられ後勅任教授に進む大正五年英國倫敦の萬國法律協議會に臨み同會の副議長に推され我が國法學界の泰斗として聲名内外に噴々たり。

宮内可一

宮内棟吾の次男明治四年五月二十九日岸和田に生る兄早く没して家を嗣ぎ。同十二年五月小學校に入り同十九年十一月卒業。同二十年大阪に出でて豫章館に入學英漢數の學科を修め事三年是より先母を喪ひ後父の計に違ふや恨みを吞んで歸郷した時に年二十歳同三十年恩成會の會長に推され同三十四年町會議員同三十六年小學校の學務委員に選ばる同四十年泉州織物株式會社の取締役兼に指され同四十五年一月一日病床にあり豫て心血を注いで成立し盡したる四ヶ町村合併の成るを聞き病苦を忘れて其の成功を喜び同月二十日終に永眠した享年四十一遺言して金一萬圓を岸和田町奨學資金に投じた今日の宮内奨學資金は即ちそれである。

吉野千ヨ

吉野又平の四女。明治二十一年十二月十五日生る性質温順美和にして克く業務に精勵す。初兄姉十人ありて千代は其の末女たりしも皆夭折して千代一人のみ遺る。父又平は多年の不幸に遭遇して多額の負債を生じ生計の困難を免れむとして他より養子を迎へ其の妻を娶つた時に千代八歳。而も不幸又加はりて養子は不治の疾病に罹り臥床十有餘年。終に藥石効なく死去し一家いよく悲慘を極

め生計困難に瀕した、此の時千代は一身を犠牲に
供して父母を養はん、岸和田初頓會社の女工とな
り書食間断なく孜々とし、業務を勤み忠實勉強家
に超へ一般上女の模範として特選優遇を受け朋友
の羨慕する所となつた、其の得たる金を以て父母
の必要な一切の物を需り其の餘す所を以て月々
負債を償還し近隣感賞せざる者なかつた、明治四
十二年十一月與風會は其の善行を賞して金目を贈
與して篤く表彰の典を舉げた。

岡部政責

幼名を磯馬三云ふ、岡部右門の子にして嘉永元年
七月十四日生る、岡部庵の嗣子となつた、明治元
年總裁有栖川宮徳仁親王を征討總督として以て東
陣の賊を討せらる、や西郷隆盛兵參謀たり、少
將橋本實梁は東海道の先鋒に、太夫岩倉具視は東
山道の先鋒に、三位高倉水祐は北陸道の先鋒に、
又聖護院宮善仁親王を海軍總督となし、島田左馬
吉其の參謀たり、檣を沿道に傳へて海陸並び進む
勝安房、山岡謙太郎と並び官賊兩軍の間を斡旋し
て否戰論を主張し、前征夷大將軍徳川慶喜は安房
の忠言を容れ大義名分を悟り、恭順の意を表した
りしも久しく和蘭に留學して海軍學を修めたる榎
本武揚は首領として大島圭介等従はず、壯年の士
を煽動して官軍に抗し官賊兩軍、東、北陸、北海
の各所に戦つたか、此の年六月政責軍艦河内丸の

副長心得を命ぜらる、八月武揚は松平太郎等三開
陽艦以下の十隻盜みて品川灣を脱し、北海道の五
稜廓に據る、時に會津の若松城陥り、奥羽の諸藩
悉く降伏す、是を以て賊將圭介等身を容るゝに
所なく遁れて龜田に走り武揚の軍に投ず、賊軍復
振るひ水陸一齊に進みて松前城を攻略し其の附近
を占領す、蝦夷の地大半其の有に歸し賊徒潛して
職司を定の武揚を以て總裁となし太郎は其副たり
圭介は陸軍を督し、荒井郁之助は海軍を督し、勢
威を北海に振つた、同二年正月、政責軍艦福春丸
の副長を命ぜらる、三月十三日、聖護院宮善仁親
王勝安房を召して云々、榎本釜二郎、大島圭介の
二人は俱く留學して西洋式の海軍術に熟達す、今
彼を撃ちて北海の亂を鎮めむ者頼にあらすして誰
ぞ、薩長土肥の兵強し、雖も未だ曾て海軍術に名
あるを聞かず、頼連に我軍艦八隻を率る蝦夷に
進みて函館の賊を討伐すべしと、安房答へて曰く
予は最初より非戰論を主張し武揚圭介等に爭論數
回、今兵を率ゐて戦地に向は、彼等が宿意に従ふ
も同じ、泉州岸和田藩に岡部政責三云ふ者あり、
彼は夙に我門に入りて海軍術を學び武略總論、今
福春丸の副長たり、頼はくば彼をして今回の任務
に當らしめ給へと、親王即日政責を徵して北海道
の賊徒討伐の事を命ず、政責命を承け一躍して春
日艦に乗り戦艦七隻と共に威風堂々品川灣を抜縮
して北征の途に上り宮古灣に至る、賊艦三隻襲來

し接戦少時にして賊敗走して北海に逃ぐ、四月官
軍の艦隊進みて江刺を復し賊を松前城に攻む、陸
軍六千五百人上陸し、海兵三相應て攻むる事甚
急なり、賊軍敗れて函館に退く、官軍追撃して函
館に迫り戦數日、賊艦富七、福龍千代田、回天
の四隻撃破せられ氣勢大に沮つて賊皆五稜廓に入
る、官軍使を遣はして降伏すべき旨を諭するや、
賊の降る者前後一千餘人、是實に明治二年五月
十八日の事なりき、八月政責富七艦の一等士官
なる、九月戦功に依り賞典銀五十石を賜ふ、同三
年二月十五日命を奉じて北海道の海岸を測量す、
八月九日富士艦の副長を命ぜられ、同四年五月二
十二日海軍大尉に任ぜらる、同六年三月春日乗組
を命ぜらる、同八年三月二日正八位に叙せられ、
同九年十二月十五日高雄丸の副長を命ぜらる、同九
年一月六日韓國出張を命ぜらる、九月金八十圓を
下賜。
海軍大尉正七位 岡部 政責
黒田特命全權代理大臣ニ隨行シテ朝鮮國へ出張
シ盡力候ニ付其賞トシテ別冊目錄ノ通リ賜帳事
明治九年九月二十二日 太 政 官
同年十月七日疾を得て逝く。

川崎藤七

岸和田の人、前町會に助役たり、一度町會議員と
なり敏腕を奮ふ、資性温順にして能く人を救ふ、
町會に於けるや勤勉至誠業務に従事す、眞に公吏
の模範となすに足る、町會にある亦能く公事に努
力し大いに貢献する所あり、眞に世人の模範とな
すべし

芳香風味



天下一品

寺田醸造部

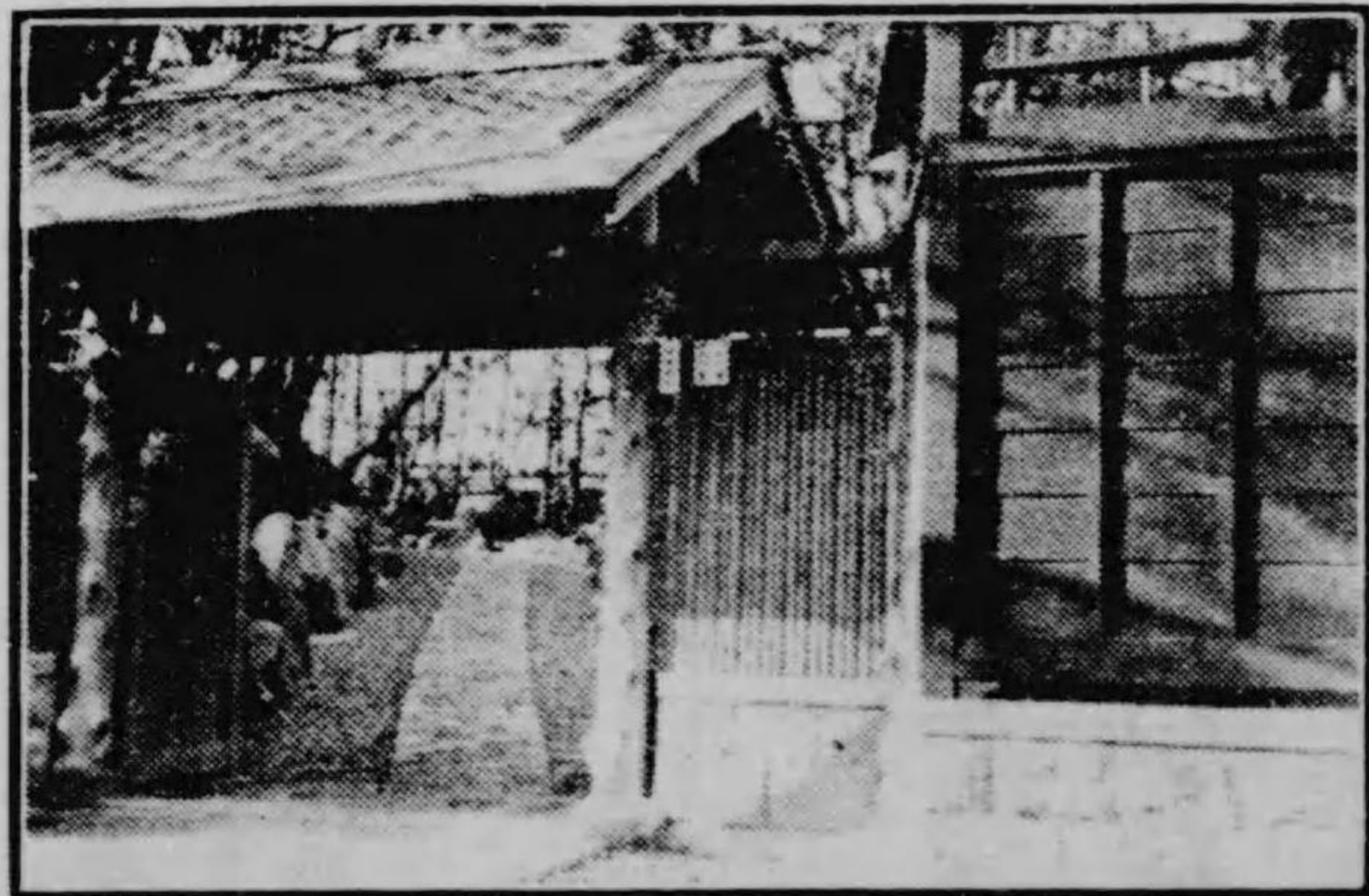
清酒「元朝」の
優秀なる理由

- 一、原料は特に酒造に最も適當なる優良米を自家精米所に於て細密周到なる注意監督の下に精選したる酒米を使用す。
- 二、製造方法は多年の研究と経験の結果自家獨特の醸造法に依り醇良にして風味佳良且つ芳香天下一品の銘酒を吟醸す。

酒造業

岸和田市並松町
寺田正藏

風



景

絶

佳

泉州樓

會御
席料

伊藤明吉
岸和田市大北町
電話二七二番八番

祝 岸 和 田 市

岸和田市

岸和田紡績株式會社

電話 壹百〇壹番
社長 寺田甚與茂

大阪府岸和田市

關西製綱株式會社

取締役社長 寺田元之助
專務取締役 藥師德松
支配人 寺田榮一
電話 一四八〇番

岸和田市南町

泉州織物株式會社

社長 寺田元吉
專務取締役 島田良藏
電話 二二六番

岸和田市大工町

泉州瓦斯株式會社

取締役社長 岡田伊平
支配人 黒川重一郎
電話 百三十番

岸和田市魚屋町

現有價證券
買賣 十場八郎商店

電話 二六八番

岸和田市下野町

和泉座主 杉原楠松

電話 四二六番

最 上 醬 油

專業 泉一販賣部

岸和田市かじや町

店主 堀野福一

乘合自動車
貸自動車

久米田自動車株式會社

本社 南掃守村下松
營業所 山直下村新在家
出張所 岸和田市宮本町
驛前新道

祝 岸 和 田 市

岸和田市五軒屋町

有價證券
委託買賣

大五商店

電話 三二八番

岸和田市北町

岩井株式店

店主 岩井辰之助

電話 二六三五番

岸和田市本町

文房具商

西田文錦堂

店主 藤原龜太郎

電話 貳四五番

岸和田市宮本町驛前南入

內外雜穀商 河合商店

岸和田市下野町

川崎自轉車商店

大阪府下岸和田市下野町

諸印章
ゴム印章彫刻 大正堂印舖

岸和田市宮本町

和洋御菓子
餅饅頭赤飯
岸餅類小賣
寺田商店

岸和田市魚屋町

はりや

金物商 烏野彌藏

電話 四一九番

岸和田市下野町

朝日印刷所

塩元賣捌所

石炭、石灰、薪炭問屋

全上林位志雄商店

岸和田市港

電話 四十二番
大阪振替 二五九九番

大阪毎日新聞販賣所
岸和田市一手

岸和田五軒屋町

毎日舍新聞舖

祝新岸和田市

大阪府岸和田市北町

有價證券
現物專業

笠谷清吉

電話 百六十八番
二百八番

岸和田市沼町

川崎綿布株式會社

電話 四〇番

岸和田市本町

株式會社 不動貯金銀行

岸和田支店

電話 二〇六番

創立大正四年十一月二十日
資本金 五拾萬圓

東洋麻糸株式會社

社長 寺田元之助
支配人 鹽野亥三郎
大阪府泉南郡麻生郷村字津田
電話 一一四番

岸和田市大北町

關西石材會社

岸和田出張所

電話 三四八番

岸和田市五軒屋町

製和洋菓子
造販賣子

利久堂

岸和田市北町

鹽野醫院

簞笥長持
御婚禮用
小道具一式
各國漆器
洋家具類
御乳母車

卸小賣



西村安藏商店

泉南郡岸和田欄干橋南詰
電話(マルヤス)
電話四百十五番

岸和田市並松町

伊藤由松

電話 一七一番

和洋菓子
洋菓酒
食料品
罐詰器

岸和田欄干橋南詰

宮庄支店

祝新岸和田市

織機及
諸機械
修繕



大阪府岸和田市筋海町
鍛冶廣鐵工所

電話三三二番

精コークス
各種製造
瓦斯コークス
木炭販賣

岸和田市並松町

南陽商會

電話四二三番

岸和田市沼町

土木建築請負業
野上徳右衛門

電話三四四番

營業科目
ビッキングパン
織布用ヘット
ロー植油
動植用各種
紡織用各種
製造販賣

牧熊次郎商店

岸和田市五軒屋町

府會議員選舉人名簿

南町 五四名
本町 九七名
堺町 六六名
魚屋町 三四名
北町 一五名
並松町 九九名
下野町一六一名
上野町 二名
藤井町 二四名
別所町 一七名
沼町 七四名
筋海町 六五名
五軒屋町七四名
宮本町一七名
岸城町 六二名
上町 七八名
野田町 七名
南上町 一名
大工町 六九名
中之濱町四三名
紙屋町 三三名
大手町 二二名

府會議員選舉人名簿

大正十一年九月十五日現在調

中町 三三名
中北町 六五名
總數一四六〇名

▼南町▲
今井松之助 角井國太郎
池内榮二郎 粕谷利吉
池宮清助 唐谷安太郎
池宮清七 唐金音松
石野芳太郎 米谷安太郎
石野清一郎 米谷辰之助
石井幸壽郎 高田梅太郎
石井末吉 高田彌吉
泉川龜治郎 田端辰治郎
春谷市松 樋谷繁太郎
長谷川博衛 宇賀仙太郎
西村彌治郎 浮舟音次郎
西村繁治郎 貫戶幸次郎
西村彌藏 山村豐吉
戸口岩太郎 藪野文五郎
奥野慶治 藪野安吉

八尾吉松
前川卯之吉
前河寅松
牧野茂吉
松本甚太郎
福本瀧藏
古江常吉
寺田甚與茂
寺田甚吉
寺田治三郎
朝代市松
天野安次郎
菊辰之助
木下勇治郎
雪野幸四郎
南元治
永田乙吉
十塙繁之輔
十塙繁太郎
平井平太郎
森岩松
▲本町▲
稻葉兵四郎
泉本安太郎
畑野幸之助

針本熊吉
鯉谷三藏
西田徳松
西村米三郎
西出新太郎
堀野定次郎
堀野元吉
堀野力松
堀野伊太郎
細濱芳太郎
虎野松之助
虎野治
土肥忠次郎
大森良太郎
大森光太郎
太田淺吉
岡田伊平
奥野岩太郎
川崎庄太郎
川崎由松
川崎繁太郎
川口松太郎
河合佐之輔
鳥野長治郎

鳥野友吉
加藤堯壽
加藤仁太郎
片山卯之助
垣純吉
吉森久吉
吉野時之助
吉野音吉
田中常吉
田山龜太郎
竹内小一郎
谷口太一郎
谷口龜太郎
谷口伊三郎
高井清平
高倉熊次郎
高畑熊次郎
高岡勘平
棚野庄治
辻合安次郎
辻金男
津田幸太郎
津田友次郎
津田長吉
中村道貫

仲村光男 中尾馬太郎 永橋幾太郎 永谷久吉 鍋谷安太郎 向井清藏 藏川政吉 久住政七 山内爲太郎 藏政吉 安田幾太郎 安田恒二 松浪定吉 松浪嘉藏 松村留吉 松井安吉 藤原龜太郎 藤川國松 福島弘 古金安次郎 小山藤平 小砂源七 戎野政勝 出上定吉 淺田吉松

落合準之助 和野伊太郎 葉谷久吉 川崎佐次右衛門 川崎治三郎 川崎藤七 川崎善七 川崎爲次郎 川元顯二 川原隆五郎 川原増太郎 河浪幹一 河内源十郎 河内楠太郎 河内喜一郎 鳥野喜一郎 覺野由三郎 覺野勝三郎 覺野久吉 覺野眞三 覺野德平 笠野清吉 角野勝治郎 角野新藏 貝塚留吉 家中龜太郎

横田福松 田中喜兵衛 田中龜藏 田仲松 田村三治 田原口良友 竹川龜吉 谷良藏 忠岡大吉郎 多賀信三郎 辻田計三 津田繁吉 津村秀一 中村宇一郎 中出勇太郎 中田九一 中川英彦 永橋茂一郎 村井新一郎 浮舟亥之男 内田彌七 久住直吉 久住善一 山本三津藏 山下榮太郎

山口虎太郎 山中喜右衛門 山城音市 山井楠太郎 松谷松太郎 松井安藏 眞子安藏 福井楠喜 藤原政次郎 藤原榮三郎 深井與之助 二山泰 小林幸吉 小長谷友治 小倉政市 小門善一 近藤清 寺田元之助 寺田元吉 寺本末吉 出口安太郎 出口久吉 阪口利三郎 櫻井幸太郎 三田寅吉 岸本良太郎

岸 勘治郎 金納源十郎 北野廣吉 貴納芳松 南松之助 宮内恰吉 峰尾定市 平松保三 平泉長太郎 久松龍吉 廣瀬政吉 森川市太郎 杉本寅吉

西出勇 本田庄太郎 本田勝治郎 細川久吉 星田龜太郎 太木秀太郎 和田稔之助 河野喜太郎 河野銚吉 梶野福松 勝井金吾 吉田久米造 吉川見吉 芳谷權之助 横田武十郎 田口楠英 竹内十一郎 竹内安太郎 竹谷薫明 谷本友吉 谷本友吉 高田駒吉 高岡竹松 高林半二 玉井直吉

岩田佐一郎 岩井辰之助 出原安次郎 市塲嘉藏 巖崎芳之丞 春崎良藏 春木卯一郎 原三郎 原寅吉 林榮太郎 林菊松 伴安太郎 西村卯之助 西村安太郎 西村松次 西村楠吉 西田庄太郎 西田辰之助 新川常次郎 本田誠雄 堀野福一 保木本繁之助 豐田安太郎 茶野安太郎 小田文吉

落合準之助 和野伊太郎 葉谷久吉 川崎佐次右衛門 川崎治三郎 川崎藤七 川崎善七 川崎爲次郎 川元顯二 川原隆五郎 川原増太郎 河浪幹一 河内源十郎 河内楠太郎 河内喜一郎 鳥野喜一郎 覺野由三郎 覺野勝三郎 覺野久吉 覺野眞三 覺野德平 笠野清吉 角野勝治郎 角野新藏 貝塚留吉 家中龜太郎

横田福松 田中喜兵衛 田中龜藏 田仲松 田村三治 田原口良友 竹川龜吉 谷良藏 忠岡大吉郎 多賀信三郎 辻田計三 津田繁吉 津村秀一 中村宇一郎 中出勇太郎 中田九一 中川英彦 永橋茂一郎 村井新一郎 浮舟亥之男 内田彌七 久住直吉 久住善一 山本三津藏 山下榮太郎

山口虎太郎 山中喜右衛門 山城音市 山井楠太郎 松谷松太郎 松井安藏 眞子安藏 福井楠喜 藤原政次郎 藤原榮三郎 深井與之助 二山泰 小林幸吉 小長谷友治 小倉政市 小門善一 近藤清 寺田元之助 寺田元吉 寺本末吉 出口安太郎 出口久吉 阪口利三郎 櫻井幸太郎 三田寅吉 岸本良太郎

岸 勘治郎 金納源十郎 北野廣吉 貴納芳松 南松之助 宮内恰吉 峰尾定市 平松保三 平泉長太郎 久松龍吉 廣瀬政吉 森川市太郎 杉本寅吉

西出勇 本田庄太郎 本田勝治郎 細川久吉 星田龜太郎 太木秀太郎 和田稔之助 河野喜太郎 河野銚吉 梶野福松 勝井金吾 吉田久米造 吉川見吉 芳谷權之助 横田武十郎 田口楠英 竹内十一郎 竹内安太郎 竹谷薫明 谷本友吉 谷本友吉 高田駒吉 高岡竹松 高林半二 玉井直吉

野口辰藏 野原茂 三原貞 關二郎 西上町▲ 西山治兵衛 大工町▲ 春木安太郎 春木捨吉 林福吉 西寅吉 問屋楠吉 大塚五郎吉 大塚彌藏 奧辰之介 奧福松 川向由松 河合彌三吉 河合政男 河合屋與三松 烏野勘次郎 烏野辰之助 烏野鐵之助 烏野千太郎 烏野伊太郎

鳥野庄二郎 鳥野久吉 鳥野梅吉 鳥野熊吉 鳥野龜吉 鳥野廣吉 加減好治郎 加減松之助 加減眞造 加減松藏 笠谷庄太郎 笠谷松藏 吉田松藏 萬屋與藏 萬屋砂藏 夜明榮吉 蕎原梅太郎 蕎原三藏 中村由松 永橋松次郎 永橋庄藏 浮舟八吉 浮舟十吉 浮舟利吉 浮野一茂 姥榮次郎

姥榮藏 貫戶政次郎 貫戶與一 貫戶清次郎 貫戶梅吉 貫戶熊吉 山本市太郎 丸山鶴之助 丸山松之助 又野貞次郎 見山源藏 丸山留吉 深井三吉 小藤榮吉 鐵野安太郎 堺井松之助 堺井吉一郎 佐海徳三郎 金納又右衛門 金納猪之吉 金納又榮 善野辰之助 善野岩吉 善野由松 善野久吉

西村義保 新川安吉 新川茂市 兵野己之助 兵野由松 頓花仁三郎 頓花亥三郎 頓花藤吉 岡田藤吉 河合澄夫 河合安吉 笠谷卯之助 笠谷千太郎 笠谷嘉一郎 勘六野福松 角谷宇三郎 角野寅造 閑陸久吉 閑陸與藏 吉野安之助 吉野若松 吉野三藏 吉野楠松

吉野國松 吉野久吉 吉野林之助 田原藤吉 大工卯之助 中谷重太郎 藏野丈助 穴倉金助 左納治良平 左納治良保 左納音藏 阪口安太郎 阪本平衛 宮崎薰 門三安太郎 門三六五郎 住田喜代松 泉本松之助 土生岩松 西野三藏 西野内房吉 烏野貴一 角野善平 掃部亥之助

吉田常治郎 吉野覺治良 吉野留吉 田中安太郎 武部彌三郎 辻文吉 宇野久吉 宇野榮次郎 宇野福松 宇野次郎吉 宇野駒吉 藏野卯之助 藏野辰之助 藏野庄太郎 藏野音吉 藏野常吉 網代政吉 網代常吉 北井留吉 彌井留吉 城津榮次郎 城津四郎吉 庄司野安太郎

東市松 森茂吉 木岡安太郎 岸城町▲ 池田國太郎 岩本公平 稻田惣三郎 伊藤吉彦 出原良治 春木徳松 西山勝次郎 西出力松 太木富勝 落合保 渡邊謙三 若林楠太郎 加藤長之助 覺野英之助 鎌木利三郎 梶野喜太郎 梯三男 田中藤五郎 田中義臣 田村讓 田代循

高久六郎 橋由重藏 津村重吉 中原久次郎 中塚安治郎 村田宜寛 向井仙松 武藤直矢 上田義和 上床義隆 楠井卓郎 山本楠太郎 山岡邦三郎 山岡幾太郎 山岡幾太郎 松田幸太郎 松田重雄 松邑長造 藤島市太郎 深見儀三郎 兒島熊次郎 田中作衛 江川平治郎 江阪正清

寺田見龍 出口猪之松 山東善之進 佐藤八十夫 佐々木信次郎 佐々木六郎 齋藤堅太郎 岸田清太郎 白井俊三 平松繁治 平生乙彦 肥後正一 關欽哉 鈴木俊吉 須藤秀樹 菅田元成 荻上町▲ 松三郎 間福太郎 間市松 間官治 道姓吉太郎 道姓徳太郎

道姓寅松 道古久米太郎 道古磯次郎 奥千代治郎 奥辰之助 奥淺吉 奥治作 川崎常次郎 角野繁三郎 辻孫一郎 辻菊太郎 植山春松 植山文二郎 植山平二郎 植山甚右衛門 浦田甚之助 浦田政太郎 浦田政吉 山田定治郎 山田徳太郎 山田政治郎 山田助松 山田茂 藪淺治郎 藪元次郎

藪勇三郎 藪三十郎 藪十三日 藪定治 藪久吉 藪徳松 藪七藏 藪文作 藪文與 藪文之助 松谷市太郎 松本捨松 福本市松 藤田重次郎 藤田辰三 藤田久保 藤田喜代門 岸田三太郎 岸田三太郎 岸田政與茂 岸田幸治郎 岸田與治郎 岸田徳三郎 岸田政次郎

岸田喜一郎 岸田卯之八 岸田孫太郎 岸田權次郎 岸田磯次郎 岸田寅太郎 岸田彦太郎 岸田政義 岸田政夫 岸田清次 岸田竹松 岸田房吉 岸田直吉 岸田幸吉 岸田増藏 岸田清藏 木下萬吉 木下三藏 木岡徳太郎 木岡進太郎 野田町▲ 羽室音松 和田治平 川岸專治

307
211

終

